

明治前期における日本の陸運企業と商取引

—— 中牛馬会社を事例として ——

王 慧 子*

Abstract

The Chugyuba Company is a representative long-distance land transportation company in early modern Japan, which was established in 1872 in the northern Kanto and Koshin regions. Until the railroad opened, it was responsible for freight transportation using various means of transportation and supported the development of commercial transactions between remote areas. This paper elucidates the long-distance transportation route and transportation method that connects the Pacific Ocean and the Sea of Japan side by the Chugyuba Company until the 10s of the Meiji era. In addition, the quantity and contents of freight transportation will be examined with specific data. Furthermore, by analyzing the customer base of the commercial transactions of the Chugyuba Company, we will clarify the actual conditions of the transportation activities of land transportation companies, remote inter-regional commercial transactions and the development of the market economy.

Commercial transactions during this period can be said to be an extension of the product distribution network between local castle towns and Edo in the early modern period. While the import and export of commodities expanded due to the expansion of commercial transactions due to the development of the local economy, it provided a source of potential and profits for the development of Chugyuba company.

1. はじめに

明治維新以降、政府の諸政策によって日本の産業発展と交通運輸改革が著しい進展をみせた。国際貿易およびそれと連動した国内市場の拡大が、全国的な都市＝地方間および地域間の商取引規模や数量の飛躍的増大をもたらした。同時に、生産、消費、流通にわたる各分野の産業を物流としてつなぐ交通運輸業も重要な役割を担うことになった。明治10年代以降の鉄道建設熱と汽船導入熱に代表される交通手段

の発展は商品流通を拡大させたが、この時期、実際に荷主から仕向け先に至る顧客との間で商品移送契約を取り付け、商取引に伴う地域間貨物運送業務に携わったのは、「内国通運会社」や「中牛馬会社」と呼ばれた陸運企業である。特に内陸地方において、これらの陸運企業が鉄道開通までの商品流通拡大に大きな役割を果たした。本稿で取り扱う中牛馬会社は、1872（明治5）年に北関東・甲信地方に設立された代表的な長距離陸運企業であり、昭和初期にいたるまで様々な運輸手段を利用し、多様な国内貨物輸送業務を担い、国内市場の発展を流通の分野で支え続けた。

近代交通運輸史の研究は、これまで鉄道交通業や舟運・海運業等といった交通技術面の革新

* 東北大学大学院経済学研究科博士研究員。本研究は日本学術振興会科学研究費2019～2022年度若手研究（課題番号：19K13752）の成果の一部である。

に焦点を当てるが多かった。例えば、日本通運株式会社社史(1962)¹⁾や山本弘文の一連の研究(1983, 1994)²⁾では、幕末・明治維新期の日本陸運業の改革プロセスを日本通運株式会社の前身である陸運元会社、内国通運会社に焦点をあてながら、道路輸送の制度史的な変化や輸送手段の改善、輸送能力の増大などに注目しつつ、明治20年代半ばに内国通運会社に代表される道路輸送業者が長距離道路輸送から鉄道貨物の取扱業務へと全面的に転換するプロセスを論じ、日本における近代的陸運業発展の全体像を描くのに成功している。しかし、研究史全般にいえることだが、基本的に鉄道開通までの内陸運輸業の産業史・経営史的な研究蓄積は極端に薄く、企業活動の実態にせまる一次資料を用いた研究がほとんど存在していない。交通運輸業と商品流通に関する古典的・代表的研究である古島³⁾(1951)の近世期中馬運輸業に関する研究でも、近代以降の展開については残念ながらほとんど触れられていない。交通輸送の物流業者と商品流通との結び付きについては老川⁴⁾(1992)の研究が代表的である。当時の商品流通では河川舟運の担う役割がいかに大きいものであったのか、また鉄道開通による地域輸送網の再編成がもたらした農村地域の商品流通・輸送の変容過程の全体像はどのようなものであったのかを明らかにすると同時に、荷物の輸送実態や、地方産業の発展と東京市場圏の形成の関連性を立体的に論じている。しかし、ここでも、鉄道開通前の陸運業を内陸商品流通

の実態と変容の過程として検討する作業はなされていない。

本稿では1872~1880年代の小山家文書⁵⁾の帳簿史料を分析する。同時期の交通運輸業再編が生み出した物流企業による内陸商品流通市場の特徴、民衆の生活基盤にかかわる商取引の実態を具体的なデータを挙げながら解明するわけであるが、それを以下の三つに焦点を絞って論じてみる。

① 近世中馬とは一線を画した近代中牛馬会社への組織再編成がどのように行われ、上信越、殊に信州を拠点とする商取引と流通の特徴、ルートの変化がどのようなものであったのか、を解明する。

② 市場経済化の進行とともに中牛馬会社が取扱う商品荷物の数量と質の変化に着目し、当時の流通取引の規模と内容の変化を明らかにする。

③ 中牛馬会社が請負った荷物運送の依頼主=顧客層の実態を明らかにすることにより、当時の内陸市場における商取引の構造とルートの特徴を解明する。

以上の三点から、明治維新後から明治10年代(1877)前後までの内陸貨物輸送の特徴を明らかにし、当該時期の流通市場の歴史の変容の姿に迫ってみよう。

2. 明治前期の商品流通ルートの形成と中牛馬会社

2-1. 創業期中牛馬会社の運送範囲とルート

幕末開港以降、信州を中心とする中央内陸部における商品流通と輸送は、近世中馬の輸送体系に依拠しながら、甲府、松本、飯田を三拠点とし、脇街道などを縦横に利用しつつ、上信越と東京・横浜の間で生糸などの輸出荷物や多種

1) 日本通運株式会社社刊『社史 日本通運株式会社』1962年

2) 山本弘文『維新期の街道と輸送(増補版)』1983年、法政大学出版局

山本弘文『近代交通成立史の研究』1994年、法政大学出版局

3) 古島敏雄『江戸時代の商品流通と交通—信州中馬の研究—』1951年、御茶ノ水書房

4) 老川慶喜『産業革命期の地域交通と輸送』1992年、日本経済評論社

5) 長野県小諸市小山五左衛門文書。小諸中牛馬会社と中牛馬会社全体の史料群である。

多様な輸入品を扱う新たな貨物輸送活動を行うものへと変容しはじめた。明治維新後、中馬の輸送体系は、中牛馬会社として新しく同盟組織を構築することにより、長野、上田、小諸、高崎を拠点として、陸路と舟運または鉄道を繋ぐ、日本海側と太平洋側を連結する長距離運送ルートを創出することになる。

まず、中牛馬会社の運送路線について概観してみよう。中牛馬会社は明治5(1872)年5月に創業された輸送会社である。しかし、創業後まもなく、東北信中牛馬会社は、南信の中牛馬会社とは別個に独自の活動を行うこととなり、長野、上田、小諸、和田を中心に荷物運送業務を行った。そもそも中牛馬会社は、旧街道、脇街道沿いに、会社と定宿・荷扱所を設置し、荷物運送路線を定めていた。中山道、北国街道、佐久甲州往還、佐久野沢から上州富岡行、北国往還、野尻より上州高崎廻り、飯山より越後猿橋廻りなどの路線があげられていた。東京、倉賀野、高崎、松井田、小諸、上田、長野、新潟中牛馬会社の中心会社が所在地する地方を連結する路線は中牛馬会社全体のもっとも重要な太平洋側と日本海側を連結する長距離輸送ルートであった。このルートでの運送は、上州、信州、越後、北陸各地から上州高崎また倉賀野までの陸路を牛馬背で行った。さらにそれ以降は馬車会社の陸路と倉賀野河岸らの舟運とを用いる継立運送方式を採り、荷物を東京または横浜へと輸送した。

小諸中牛馬会社は、小諸に拠点を置く中牛馬会社であったが、創業期は、中牛馬のルート全体の中で、中仙道上州方面から追分を経て北国街道に繋ぐ路線、和田峠を越えて佐久甲州往還の路線、そして佐久野沢から上州富岡行といった路線が、主要運送路線であった。小諸中牛馬会社には、明治10年(1877)の荷物運送路線、数量と種類を明らかにする「明治10年小諸中牛馬会社東行荷物運送調べ」(表1)と「明治10年小諸中牛馬会社西行荷物運送調べ」(表2)

が残されている。そこでは、「東京より新潟港に繋ぐ路線、芦田より小諸から群馬に繋ぐ路線(飯田、諏訪伊那地方につなぐ)、長野より山梨に繋ぐ路線(甲州通路)」などが挙げられている。これらの路線の中では小諸、高崎と倉賀野の中継地としての役割が大きかった。荷物の運送数量から見れば、上田方面⁶⁾から高崎方面への荷物は6,422駄、高崎方面から上田方面への荷物は11,457駄であり、最も多かった。この時期、小諸中牛馬会社の中心荷物が、上田と高崎間の荷物運送であったことが判る。日本海側と太平洋側間の商品流通全体は、さほど大きなものではなかったというべきだが、上州からの「輸入」品は信州からの「輸出」品の二倍に上る規模であった事実を指摘しておきたい。

2-2. 陸路と舟運の継ぎ立て運送ルート

明治16年(1883)に上野～熊谷間に鉄道が開通するまで、中牛馬会社が請負った上信越各地の荷物を東京まで送る長距離輸送は、倉賀野まで陸送し、ここから舟運へと継ぎ替えるのが一般的であった。明治4年(1871)創業の「高崎馬車会社」も利用されていたことがわかるが、「大至急」荷物ないし「紙包」、「菰包」小型の包み荷物と書状などの荷物がほとんどを占めていた。時には「横濱追附馬」のように馬背で運送する荷物もあったが、その事例は数えるほどしかない。

創業時点から既に、中牛馬会社と倉賀野河岸の舟運業者との間では、同盟あるいは提携関係を締結していた。高額運賃であった馬車運送に比べ、舟運は低価で大量輸送が可能という利点があったため、長野県産の生糸等、高価な荷物さえも舟運利用が一般的であった。1872年8月～1877年までの「東西送状改帳」(表3)の

6) これらの帳簿の記録は小諸を中心とする帳簿であって、小諸中牛馬会社が継ぎ立つ荷物は上田と高崎からが多いのであるが、必ずしも上田、高崎が出荷地ではなかった。

表1 1877年小諸中牛馬会社東行荷物運送調べ(単位: 駄)

	東京より新潟港二達する路線				長野県芦田より小諸 経て群馬県迄路線		合計	長野県より山梨県へつながる路線 (甲州通路)				合計
	上田～ 高崎	小諸～ 高崎	上田～ 松井田	小諸～松 井田	芦田～ 小諸～ 松井田	芦田～ 小諸～ 高崎		小諸～ 岩村田	小諸～ 中込	小諸～ 野沢	小諸～ 白田	
生糸	637	30		1			668					
呉服太物類	59	3.5	6	21			89.5			10	4	14
繭	280						280					
蚕種	130						130					
出売繭	217	7					224					
生麻苧	131						131					
麻荷	257						257		20			20
博覧会出品	20						20					
畳糸	387						387			24		24
細美布	55						55					
米	241	5	144	93			483			1		1
大豆	98	10		3			111	12	28	80	4	124
小豆	174	105	42	5			326	4	3	1		8
水油	36	109		33			178	12	14	6	2	34
杏干	223		3				226					
石油	60	8	2				70		1	6		7
紙類	293	5.5	14	2			314.5	16	2	15	2	35
刻煙荷	2,267	5	7	1.5			2,280.5					
肴類	24	13	18	16			71	66	7	97	7	177
合葉	150						150					
葉種	89	29	1	1			120			4	2	6
下駄	71	1					71			7		7
菅笠			226				226			58		58
飯田産物, 元結		2.5			3	629	634.5					
太神宮御玉串								4				4
雑荷	524	86	87	66			763	96	39	113	33	281
合計	6,422	419.5	550	242.5			8,266	210	94	442	54	800

※雑荷 上田～坂本 15 駄 小諸～坂本 17 駄 上田～軽井沢 15 駄 上田～沓掛 6 駄 小諸～軽井沢 24 駄 小諸～沓掛 13 駄 上田～追分 13 駄 小諸～追分 33 駄 小諸～馬瀬口 47 駄 小諸～高野町 小諸～望月 6 駄 上田～小諸 43 駄 小諸～近辺配達 125 駄
出所: 小山家文書 明治 11 年 (1878) 「運送物貨駄数取調路線並種類区別書」により作成

記録によると、小諸中牛馬会社が請負った運送荷物の出荷者は、長野、上田地方を中心とする商人と高崎、松井田、富岡また埼玉、東京、横浜、大阪の各地の商人たちであった。なお、東京、横浜までの荷物はほとんど高崎会社、高崎馬車会社、倉賀野の河岸舟運問屋まで送られていた。

1872 年から 1883 年までの間、上田方面から送られる荷物は、小諸で一泊継ぎ立て、松井田で泊まり、高崎で継ぎ立て、倉賀野河岸まで送るといったパターンの運送が最も多かった。

1873 年「越後屋荷物受払帳」における東京、横浜越後屋までの生糸類荷物運送記録では、「上田出、小諸泊まり、松井田大河原太七⁷⁾泊まり、高崎馬車会社荷車送り、高崎馬車会社継、高崎矢島嘉平継⁸⁾、倉賀野須賀善右衛門積、倉賀野田口五平⁹⁾入、東京室町二丁目越後屋喜右衛門

7) 大河原太七は松井田中牛馬定宿の役員である。
8) 高崎矢島嘉平は高崎中牛馬会社の役員である。
9) 倉賀野須賀善右衛門、田口五平は倉賀野河岸の舟運問屋であって、中牛馬会社と同盟関係を持っている。

表2 1877年小諸中牛馬会社西行荷物運送調べ(単位:駄)

路線 荷物	高崎～上田	松井田～上田	高崎～芦田	松井田～芦田	白田～上田	合計
呉服太物類	2,841		132			2,937
藍玉	657					657
砂糖類	2,379		5			2,384
魚類	814	161		7		982
鯉節	425	23				448
塩	273					273
金物類	120					120
薬種	10					10
雑荷	3,938		114			4,052
材木類					180	180
戸障子類					99	99
蕎麦					14	14
鋤物					48	48
合計	11,457	184	251	7	341	12,204

出所: 小山家文書 明治11年(1878)「運送物貨駄数取調路線並種類区別書」により作成

表3 東西送状改帳(1872~1877)

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主
明治5年	9月5日	右者香長殿出		桔梗	1箇	兼太郎	高崎会社入	大阪 小西彦七殿入
	9月5日	金澤長右衛門殿出		桔梗	1箇	佐藤 助右衛門	高崎会社継	大阪 小西彦七殿入
	9月5日	上田横町須屋兼松殿出			6入6個	西原 卯之助持	矢島八郎殿継 田口継	東京上清同留
		上田上野屋又兵衛殿出		玉蘭	2本	西原 善次郎	半田富右衛門殿継	磯部 □藏屋林藏殿行
	9月10日	綿屋久作出		玉蘭	4個	四ッ谷 政五郎	下仁田町桜平源八郎殿継	秩父大宮 関根寅吉殿行
	9月12日	荷主瀧弥□ 江戸屋道太郎殿出		刻	4個	西原 卯之助		高崎 嶋屋治兵衛殿行
		八百千代出		杏干	2俵	西原 卯之助	大河原継	高崎行
	9月13日	上野屋又兵衛		糸	2箇	四ッ谷 弥作		代助殿行
		上田より五□迄		玉蘭	2本			
	9月14日	上田総村 大黒屋 兼次郎		玉蘭	1駄	片羽 与作		原市川 半田屋富七殿
	9月17日	上田総村 大黒屋 兼次郎		玉蘭	5個	片羽 源藏		上州原市
		邑楽屋 彦五郎殿出		蕨包	2個	瀧原 勝右衛門		上州坂本 亀屋勘兵衛行
	9月11日	上野屋又兵衛殿出		干蘭	6本	四ッ谷 弥作		古着屋利兵衛殿行
	9月23日	長野会社出	上田会社継	油紙包	1個	喜代松		大伝馬町 堀越角次郎殿行
		長野高田屋重右衛門殿出	上田会社継	紙包	1個	喜代松		松屋伊太郎殿行
	9月26日	勝海院様より	上田会社継	荷物	2駄	町 房太郎 弥作		
				小付	14			
				両掛	1荷			
	10月19日	布袋屋 ○太郎		蕨包	1個	小原 佐助		上田 瀬戸屋長十行
	10月22日	吉左衛門殿分	上田会社出	蕨包	4箇	与良町 三郎		高崎 矢嶋嘉平殿行

表3 つづき

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主	
明治5年	10月22日		上田会社出	割刻	5個	小原 亀次郎	矢鳥嘉平同継	東京麴町 平河丁三丁目 有屋多喜藏殿行	
	10月28日	笹傳出		油紙包	1個		高崎馬車会社継	横浜 東京より賃先払 高崎屋嘉右衛門殿ニ而 小山勝助殿行	
	10月29日		上田会社出	矢之丞 ふし	3個	四ッ谷 弥作		高崎矢鳥嘉平殿行	
		上田踏入村綿屋久作屋 出			袋入	1個	四ッ谷 弥作		高崎連雀町 清水屋要藏 殿行
	11月3日	上田元藩山極殿分	上田会社出	蕨包	3個	四ッ谷 弥作			
	11月4日	当町 大□弥平次殿出		蕎麦粉	4個	助左衛門, 吉三郎	高崎嶋田継	武州熊谷 坂宮栄之助 殿行	
	11月5日	中屋 宗五郎		勝印	4箇	辰澤 九太郎	須賀庄兵衛殿	大文字嘉平殿	
				瀧川	4箇				
	11月8日	上田綿屋久作出		被口	6個	四ッヤ 廉藏		上州高山郷 佐俣幸三郎 殿	
	11月9日	東京深川六軒堀風呂屋 熊吉殿分	大河原出	湯津	8個	塩野 多吉 松藏	阪本宿旅籠屋ニ而	大沢行	
	11月9日	上田綿久出	上田会社出	玉繭	5本	四ッ谷 徳左衛門		上州中宿 山田屋牧太殿 行	
	11月11日	松井田出	元送付	藍玉	2個	亀次郎		上田横町 柏木屋行	
	11月13日	上田弥林様分	上田会社出	琉球包	4個	四ッ谷 銀藏	高崎定宿次	倉賀野須賀喜太郎殿行	
				小附	1個				
				書状	1通				
	11月15日	幸三郎殿荷物	上田会社出	蕨包	4個	根津 清太郎		高崎銀杏屋殿行	
	11月15日	荷主原橋伝次郎殿分		刻蕨	4箱	廣戸 多次郎		かし山与三左衛門殿行	
	11月17日		高崎より	新初雪	3樽	森山 左助 四ッ谷 幸太郎			
				新天光	5樽				
	11月18日		上田出	山平	4本	町 八藏		松井田須田屋弥平次殿行	
	11月18日	上田綿屋久作殿出		取合繭	6本	四ッ谷 才二郎		下仁田 金井啓助殿行	
	11月18日	上田綿屋久作殿出		玉まゆ	2本	四ッ谷 才二郎		下仁田 桜井源五右衛門 殿行	
	11月18日	上田中屋宗五郎殿荷物	上田出	壘糸	4個	井手 要左衛門	須賀庄兵衛殿入		
	11月19日	小山藤吉殿出		洗紙包	1個	上田中ノ条 茂作		上田原町 つた屋助右衛 門殿行	
	11月19日	信州上田原町□志屋勇 右衛門	上田会社出	中繭	麻袋入	原口 文二郎		大野屋勤助行	
				玉繭	麻袋入				
				たおり	麻袋入				
				五分	3個				
11月21日		上田会社出	金物	4個	西原 卯之助		高崎 矢嶋入		
11月21日		同所出	壘糸	4個	原口 濱吉		須賀店入		
21日 送状写	高崎新町油屋吉兵衛出 上州倉賀野上町 肴屋 奈作		嚢節	2箱	馬セ口 常吉		小諸本町 鶴ツル屋左平 次様行		
11月21日	元送付	松井田出附通し	下糖	2個	町 助右衛門		上田海野町 八百屋千代 吉殿行		
			蛙, 書 状付	5俵	町 房太郎				
	上田中屋宗五郎殿分	上田会社出	壘糸	6個			須賀庄兵衛殿行		
11月23日	山正一		上唐	8個	嘉三郎 仙吉 辰右衛 門		塚本畑助殿行		
			新天光	4樽	柏 元二郎 宇八				
			黒	2樽	柏木 周太郎				

表3 つづき

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主
明治5年	11月23日	山正一		初雪	2樽	柏木 八大夫		吉田や半右衛門殿行
	11月23日	山正一		黒	4樽	弥七、田造		上田会社行
	11月24日	上田綿屋久左出	小諸会社次	取合繭	5本	片羽村 作太郎、 赤岩村 藤吉	下仁田 桜井源五右衛門殿次	同馬山村 黒澤玉藏殿行
	11月24日			柴	8本	原口村 淀吉、 別府村 逸作		上田塚口行
	11月25日	元送付19番24日出	上田会社出	壘糸	4個	根津 金重	倉賀野須賀庄兵衛殿継	東京 近江屋作兵衛殿入
		松本北入村桑之丞荷物	芦田定宿出	藍玉	4個	八蔵、国蔵		八満 柏屋平治郎殿行
	11月25日		上田出高崎迄	繭	2本	馬七口 弥重	高崎白石屋弥重郎殿	前橋 泉屋 直之助殿行
	11月25日		元送附	壘糸	6個	角太郎 亀太郎、 文治郎		倉賀野須賀庄兵衛殿行
	11月27日			□	5個	四ッ谷 凡蔵郎、作		矢島嘉平屋行
	11月28日	上田綿屋久作殿出	上田出	繭	4本	四ッ谷 銀蔵		桜井源五左衛門殿行
	11月28日	廣卜弥作殿		柿	2俵	廣戸 房吉	板鼻 吉田屋市五郎殿入	板鼻 吉田屋市五郎殿行
	11月28日	百屋出	上田会社次	極上白	2個	宮下 長兵衛		
	11月29日		荷主付	櫛柿	1俵	借宿 亀吉		
				箱荷	1個			
				酒	2斗			
	12月1日		上田出	紙包	1個	岩村 安左衛門		松代行 つこ佐行
	12月2日	勝山市兵衛殿出	木曾 奈川村	綿	20本	牛 長十		上州 倉賀野 須賀庄兵衛殿行
	12月3日	五発組 松本出		莖包小荷	1個	牛 長十		倉賀野 須賀庄兵衛殿行
		鈴子村 万平殿分	上田出	壘糸	3個	四ッ谷 清作		1月1日 矢嶋嘉平殿
	11月29日	〇〇山地屋伊蔵殿出		繭	4本	西原 卯之助		上州高崎繩屋宗右衛門殿行
		上田会社出	葉萁	4個	西原 寅蔵	矢嶋嘉平殿継	東京四ッ谷 三河屋清吉殿行	
	柏原村松沢源兵衛殿荷物	上田	壘糸	8個	井手村 権助持		一月1日 倉賀野 佐黒新七郎殿行	
明治6年	1月3日	上田綿屋久佐久		取合繭	6本	四ッ谷 重五郎 孫左衛門		藤本屋喜藏殿行
	1月7日	山正一出		上極白糖	1個	石峠 勘九		市町 巴屋与兵衛殿行
			白唐	1個				
			新天光	1個				
			上中糖	1個				
			すだれ	10枚				
	1月8日	上田中宗出		壘糸	2個	井手 鉄三郎		
		綿久出	上田会社出	莖包	5個			上州下仁田 今井啓助殿行
	1月31日	2月3日着定	上田出附通し	紙	2個	四ッ谷 政五郎		高崎百足屋彦八殿行
	2月11日	ひだ屋 鉄五郎		めじ	2本合 11個	馬瀬口 佐助		上田海野町 舟むし 永右衛門殿行
3月27日	松代定宿	四番組上田会社	荷物	6個	四ッ谷 銀蔵、弥太郎	佐黒新七郎殿行	東京 上州屋清兵衛殿行	
4月3日	大谷 銀兵衛殿出	荷主附	大銀杏干	20個	若宮 林三 千石 源兵衛	荷主附		
	筑摩県官属瀧川平蔵殿荷	浦野出	莖包	8個	牛土 煙山 平五郎	高崎関口入		
7月4日	嶋屋勘兵衛殿出	上田	紙包	4本	文八 西〇才次、弥之助		三ツ塚 瀬下七兵衛殿行	

表3 つづき

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主
	7月8日	田中岡め屋 作左衛門殿		干満	3本			新屋□若松屋令作殿行
	7月10日	上田嶋勘出		干満	4本	上田 文八		三ツ塚 瀬下七兵衛殿行
		嶋屋勘兵衛殿出	御印紙、 元送付書状付 上田出	袋入満	4個	房太郎		三ツ塚 瀬下七兵衛殿行
	26日	大森徳十郎殿出		合薬	4個	長十		高崎新町大黒屋九兵衛殿止
	7月26日	長野藤本和助殿出		洗紙包		長作持	高崎馬車会社継	東京通塩町 長岡屋勘七殿行
		荷主附		蕨包	8個	信州矢代森村 重三 郎、元一郎、 作兵衛、弥五郎	右者小諸泊り宿加増村 高崎新町矢嶋嘉平殿継	高井郡中野 西澤新十助 殿行
			琉球包	1個				
			風呂敷包	1個				
			外曲物	1貫				
			笠	2個				
		川半出		太物	4個	馬主 敷同断	長野迄通し 矢嶋嘉平 殿継 右26日夜小諸泊り	長野大門町 柿岡屋弥平 殿行
	8月5日	松井田長谷川元七殿出		太物	2個	森山 大助	上田継	中野 富田屋治兵衛殿行
	8月18日	上田 八百屋千代吉殿 出		杏干	8俵	房太郎、助右衛門		高崎 看屋鉄之助殿行
	10月9日	荷主 向八幡村 飯島 喜右衛門殿	上田出	蚕種	5箱	小○山 銀藏 万吉		倉賀野田口五兵衛殿入
		塩崎 宮本岩藏殿分	荷主付	蚕種	4個	塩崎 九十郎	田口五兵衛殿入 大河 原泊り 、矢島次	東京大伝馬町 上州屋平 助殿行
	10月19日	若林茂平殿 荷主付		天忠種	2個	生○村 幸作	中牛馬会社横濱追附馬	東京上州屋吉助殿入
			天忠種	1個				
			小附	2個				
	10月19日	利根川市矢島持	荷主付 社中	蚕種	7個	森右衛門 附通し		田口入
				小付	2個			
			荷主付	蚕種	6個	社中田中藏作附通し		須賀庄平殿入
				小付	2個			
		手塚半右衛門殿出		蚕種	4個	社中田中藏作持附通し		田口入
	24日5時出	社中 竹内周吉持	上田出	生糸	8個	石峠 正藏	上田より倉賀野迄通し	須賀庄平殿入
				蕨包	1個			
	11月18日	高崎 矢兵衛出		蕨包	4個	八満 源八		上田原町 葺屋茂七殿行 19日
				箱荷	1個			
				文件	1半			
	11月27日	興ノ原殿出	上田会社継	琉球	10個	東田駅 長作		金銅寺 三井治ノ原殿行
				□□	10個			
			松代定宿出	下駄荷	4駄半 18箱	金吉、彦之助、助作、 重之助		東京 徳□楊大平町1丁 目 柏屋幾三郎殿行
		米屋文四郎出 和十	松本出	太物	3個	仁右田 兼藏	倉賀野田口五平殿入	栃木町森田屋弥太郎殿行
	12月21日	下板町出	松本出	太物	2個	岡村 久藏 19日出	21日上田改	高崎 松村九兵衛殿入
				2個				高崎 相屋茂兵衛殿入
				2個				高崎 福田屋新七殿入
明治7年	1月14日	留国白屋無里村		豊糸	8個	更級郡 有旅村 藤藏 田ノ口村 近治		倉賀野 須賀庄平殿入

表3 つづき

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主
明治7年	2月7日	稲荷山定宿出		葉種	8駄	八所 養八 同人		上州馬車 榎屋六十七右衛門殿行
	23日	矢島出 八儀平	上田返し	硝子板	2箱			上田○宿殿行
	4月3日入	通し荷物 稲荷山扱所出	菱野出	葉種	4個	差八持		高崎 橋屋 平右衛門殿行
		高崎吾妻町出		釜荷	8個			上田社倉入 長野洪平行
		百足屋 弥七殿出		無治黒	2樽			小原亀屋又作 江出
	8月1日	下戸倉定宿出		杏干	2駄	寂蒔 作吉 賢治		高崎 矢島八郎殿入
	11日	稲荷山出		杏肉	4個	養八持		高崎山太殿行
	9月2日	埴科郡石坂啓重殿出		蚕種	7個	小舟山 久兵衛, 茂平, 才助	東京小舟町 中島儀兵衛殿迄通し	横浜嘉者通二丁目 ○木屋嘉兵衛殿行
		更級郡向八幡村 宮浦興八郎殿荷物	上田会社	蚕種	4個	小舟山 銀蔵, 才助		東京室町三丁目 各倉出原兵衛殿連
	9月2日	更級郡力石村 田嶋茂兵衛殿 同村山崎黒右衛門殿出	上田会社	蚕種	3個	文造, 仲造	倉賀野 田口五平殿入	
				蚕種	3個			
				小付	1個			
		埴科郡雨宮村○木園喜惣太殿出	上田会社	蚕種	3個	内松		東京小舟町二丁目 中嶋屋儀兵衛殿入
	9月4日	上田 栢屋平兵衛殿出		蚕種	9箱	森右衛門, 傳三, 彦吉		倉賀野 田口五平殿入
	9月4日	雨宮 安屋松之助殿出	屋代出 千代○	蚕種	4個			東京行
		文林横田出	一○柳沢留次郎殿分	組合蚕種	4個	要松		東京行
		右同断		蚕種	4個	初太郎		東京行
	9月8日	稲荷山小出吉三郎殿出		蚕種	3箱	善八		
				小付	1個			
		稲荷山○原福松屋出		蚕種	4個	松吉		
		埴科郡杭七下村朝日角之丞殿出	上田会社	蚕種	3個	八満村 源右衛門		
		埴科郡長岡村 宮本善次殿出		蚕種	3個	上田 長岡村 九十郎	小諸蔵敷3銭	高崎 9月8日泊
				小付	1個			
		信州桑佐村 後日治五右衛門殿荷		蚕種	3個	屋代村 幸作	上田, 小諸, 安中, 高崎	東京大伝塩町 上原入
	9月10日	中村飯山屋喜右衛門殿荷物		蚕種	6個	善之助, 庄之助	倉賀野 田口五平殿入	東京上原入
				小付	1個			
		同入 高崎山正一出		セイ黒	6樽	いけ五郎 富右衛門 弥助		長野高茂行
	8日	□ト出	小布施出	油	1駄	小布施 嘉三郎		野沢 井新屋入
		八幡村 武井八郎次殿分		蚕種	3個	上田 八幡 小太郎 付け通し		高崎迄 9月11日泊
		山正一出		久助	10箱	喜作 附け通す		長野 高茂行
	9月16日	山正一出		上々中種	2個	稲荷山 善八		長野 高田屋行
		小野屋放吉殿出	長野出	蚕種	5個	万吉 附け通す	高崎次	前橋白井屋傳次郎殿入
			○繭	2個				
	稲荷山 松屋源九殿出	上田出	生糸	8個	松吉, 松吉	高崎会社	東京瀬戸○丁 田中屋鉄五郎入	
			高○	2個				
	○○百足屋長八殿出	稲荷山	高○	1個	熊松, 松吉	上田次	稲荷山 米屋 喜十郎殿入	
			切昆布	3本入 1個				

表3 つづき

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主
明治7年	10月19日	上田八●店出		田作	6俵	森山 興惣太郎	松井田会社	高崎清水差之丞殿行
	26日	上田○松屋米右衛門殿出		ふとん	12箱	定崎馬 庄五郎, 宗吉		高崎 大黒屋九兵衛殿入
	11月1日	角藤出	小布施扱出	油	3本	千代吉		○口 長屋傳二殿行
		角藤出		油	2本	同出 宇太郎		ふさ八 ○屋市兵衛殿行
	11月3日	白田長屋傳嘉殿出	小布施村	樽	10本	千代蔵	上田次	小布施村角屋藤兵衛殿行
		野沢村 井○やより		樽	6本	小布施 浦三郎	上田次	小布施村行
	11月3日	宮沢長吉殿分	五科 ○又出 初三郎	袖ソ	4箱			上田 永橋屋庄右衛門殿行
	13日入	更級郡五明村 ○木甚 兵衛殿出	上田会社	桑種	4個	小舟山 久兵衛, 外一人		甲府在半田村 小林豊蔵殿行
		小林辰太郎殿出 別府 ○作		桑種	4個			高崎九作町 綿○由五郎
	25日出	高崎山正一出		松 金 梅香油	4樽	八満 源八	上田会社	長野 釘之入
		同 山正一店出		役嶋	2樽	八満 源八		上田嶋田弥左衛文殿行
				青板	2○			
	11月30日	五料魚屋久蔵殿出		柚子	9箱	油井 伝蔵		舟橋屋 庄右衛門殿行
	12月1日	松井田 四○○ 徳蔵	上田次	蕨包	3個			長野 松井屋平兵衛殿入
	明治8年	第亥1月17日	米彦出	稲荷山荷物扱出	細 美 300反	3個	善八	
第亥1月17日		米彦出	同扱所より	細 美 35反	1個	善八		武州本店 山口金蔵殿入 ○ ○伴守殿入
1月22日		原村并幹屋市兵衛殿出		油明樽	4本	小布施 千代吉	小布施上田	角屋藤之兵衛殿行
23日			稲荷山扱所	薬種	6個	源六, 新助		
				薬種	7個	松吉, 松吉	田口五兵衛殿入	東京 上吉入
1月30日			稲荷山扱所	薬種	6個	善八		倉賀野 田口五平殿入
至ノ								
2月1日入		和泉や庄八殿出		生蠟	4個	和田村 源蔵		上田町 中屋六太郎殿行 同所 同人
亥2月15日			稲荷山扱所	杏仁	2駄	善八, 庄作		上州高崎田町 橋屋庄八
2月ノ								
第3月4日		高崎吾妻殿屋出		釜	8個	清十 志げ蔵		上田会社社長野階原入
3月11日		山サキ幾作殿分	○田分社出	刻	4個	田沢村 太傳次	倉賀野 代黒新七殿行	東京八丁入
同日		同人出	同所出	刻	4個	同村 キ○部		同人入
3月11日		重九出	会田分社出	刻	4個	田沢 関七		同人入
3月18日		稲荷山 柏屋亀助殿出	○泊り	生糸	4個	御所 八蔵	高崎継	野州足利 岡崎宿助殿行
	川上	岩村田陸運会社	戸上○ 水流	7本 11本	田五原 件蔵 ○○		上田町 木屋弥左衛文殿行	
	高崎町十一屋 庄兵衛殿出		蕨包	1個 37	百蔵		上田原町 和泉屋甚兵衛殿行	
3月31日	八五五迄	稲荷山	薬種	5個	善八持		三河 橋屋 平右衛門殿行	
4月1日	高崎吾妻屋林右衛門殿		鍋荷	1個	清太郎○, 房吉より	上田会社次	須坂佐渡幸入 上田た9厘定	
4月16日	小布施村 角屋藤兵衛殿出		種水油	2駄	多作, 太作		白田村 長屋傳二殿行	
4月13日	小布施村 角屋藤兵衛殿出		種水油	1駄	馬士 千代吉		下○村 古屋園太郎殿行	
4月25日	上田栃木屋千右衛門殿		旭鶴藍 ○	4個	馬 ま太		田町 奥州屋 前原殿行	

表3 つづき

年代	日付	出荷主	原発/継立会社	荷物品	数量	馬士名	継立会社/定宿	荷受主
明治8年	6月29日	角屋出		油	1駄			野沢 井新屋重半殿
	7月15日	上田嶋田出		干いか	4個	高崎 清太		同百足屋宗二郎殿行
	7月7日	上州豊岡 スタレ屋木千吉殿		クハシスタレ	50枚	春助		長野 榊屋与吉殿行
	7月7日	上州豊岡 スタレ屋木千吉殿		六尺竹廉	8枚	春助	上田会社	長野 小麦屋万吉殿行
	8月9日	高崎寿松連屋出		ホ口	22個	宗作		上田米万入
	8月14日	山崎屋寿松殿荷	更級郡 八幡村中牛馬扱所出	玉蘭	4本			富岡町 山木安兵衛殿行
	8月29日	寂蒔村 玉井屋徳十殿出	寂蒔村取扱所	生糸	3個	万田村 〇作	上田, 小諸中牛馬会社	安中 塩屋崎八殿行
				苘箱	1個			
	8月29日	小布施角屋〇〇殿出		種水	1駄	定〇〇		白田村 長仙伝次殿行
	9月5日	小布施村 角屋藤兵衛殿出		種水	2樽	小布施 弥五郎	角屋藤兵衛殿行	下県村 古屋国太郎殿行
	9月27日	山岸殿分	稲荷山荷扱所出	蚕種	13個	塩崎 新助引受		倉賀野会社迄
	12月5日	小布施 角藤殿出		油	1駄	嘉三郎		白田村 長屋傳次郎行
明治9年	2月17日	高崎小林隣八郎殿		釜 千ト長	6個 2個	〇志	上田会社	長野踏平殿行
	2月27日	高崎小林隣八郎殿		釜荷 五分長	2個 2個	彦九郎	上田会社	長野 安藤善兵衛殿行
	4月18日	岩村田出町陸運会社出		白田ッ 苧	3駄 12個	内三 外2人		上田通運会社入
		上州下仁田 今井七郎平殿出		三野口	6半	岩村田 喜作		粕屋喜十郎殿行
	5月12日	高崎吾妻隣助出		釜	4個	元志出	上田会社	長野安藤善原殿
	12月8日	上州八本松 綿佐出	上田会社迄通し	柚子	8個	〇 仲太		八幡行
明治10年	丑4月30日	小布施 角藤出		油	3太3 〇〇〇 井2 太	千代吉		白田

出所：小山家文書 明治5年8月より『東西送状改帳 第一号』により作成。都合によって表に運賃と量目などのデータを入れなかった。

明治7年以降は東西分け記帳するようになり、同時期の別の帳簿があるので、これらの記録は運送した荷物の全部の記録ではないと思う。

殿行、横浜越後屋徳左衛門殿行」といった運送経路を確認することができ、当該ルートの利用が確認できる。さらに、1876年には、長野県為替方彰真社が取組む生糸等荷物も中牛馬会社が陸路運送を担当し、倉賀野河岸の舟運問屋須賀善右衛門のところで継替えし、東京へと届けられた事例を発見することが出来る。1881年小諸中牛馬会社が請負った第十九国立銀行岩村田出張所の荷物の輸送は、倉賀野河岸の中牛馬会社荷物取扱所の須賀善兵衛に舟運で委託し

た。東京までは生糸荷物は2.5日、屑類荷物は3.5日かかった。東京堀江町一丁目中牛馬会社支店からは鉄道積で横浜まで運送するのが一般的であった。

2-3. 陸運業自由化による中牛馬会社の輸送網再編成

1879年、太政官第16号によって1873年に出した第230号貨物運送業統制の政策を廃止した。以後、貨物運送業は自由営業とされ、全国

的に運送業者が輩出した。長野県下では運輸会社社数は280社¹⁰⁾を数え、全国的に見ても陸運業の発達した地域だったことがわかる。中牛馬会社は、長野南信の各地にも次第に分社、支店、出張所を増やしていく(表5)。1881年、長野県下には中牛馬会社が9カ所、分社が12カ所、荷継所が102カ所を数えた。とくに、創業当初分裂騒ぎで輸送網を欠落してしまった南信地方では、諏訪、伊那、飯田、松本などに分社、荷

表5 明治14年中牛馬会社郡別分社・荷継所調(1881)

郡名	会社数	分社数	荷継所数
北佐久郡	1	3	4
南佐久郡	1	—	15
小県郡	2	1	7
埴科郡	—	2	6
更級郡	—	1	9
上水内郡	2	1	15
下水内郡	—	—	7
東筑摩郡	1	1	5
西筑摩郡	—	—	4
上伊那郡	—	2	8
下伊那郡	1	—	8
諏訪郡	1	1	3
北安曇郡	—	—	1
上高井郡	—	—	5
下高井郡	—	—	5
合計	9	12	102

出所：「明治14年4月県下中牛馬会社郡別分社・荷継所調」『長野県史』近代史料編 第七卷交通・通信 391ページ

10) 明治前期産業発達史資料 別冊(19) IV 一商況年報(明治十五年)後編— 明治文献資料刊行会 1966年11月 40~41ページ 第26表「資本ヲ株式ニ分割セザル会社」(明治15年12月調べ) 此表は本支分店ノ共計ナリ

継所を設置する例が目立った。

この時期の中牛馬会社全体の運送ルートの中心は、太平洋側と日本海側を連結するルートであった。既に述べたように、上信越の馬背による陸路輸送と利根川舟運の継立運送が相変わらず主な運送手段である。小諸中牛馬会社の場合、その輸送網は、創設期の北佐久郡域を超えて広がり、次第に小県郡、諏訪伊那地方、飯田地方へと拡大している(表6)。とくに小諸中牛馬会社に所属していた和田分社と和田峠荷継所は、飯田地方(飯田産物)と諏訪伊那地方(製糸荷物)の荷物を東京まで運送する重要な中継地となった。上丸子村荷継は上田地方(繭類)の荷物を諏訪地方へと送る重要な中継地となった。軽井沢も、小諸から碓氷峠を越えて高崎まで行くルートの重要な中継地となった。この時期以降、伊那、諏訪各地から和田峠を越えて、芦田より高崎または倉賀野経由で東京、横浜までの往復路線も、中牛馬会社全体とりわけ小諸中牛馬会社にとって重要な運送ルートとなった。小山家文書の諸契約書史料によると、1879年から1883年の間に、倉賀野河岸の舟運業者須賀善右衛門と田口五平が中牛馬会社の同盟組織に加わり、中牛馬会社荷物取扱所、中牛馬会

表6 第二部中牛馬会社小諸組出金比例(1882)

会社・分社・荷継所名	出金比例	会社・分社・荷継所名	出金比例
小諸会社	40%	借宿荷継所	6%
沓掛分社	8%	軽井沢荷継所	3%
塩野荷継所	1%	馬瀬口荷継所	1%
岩村田分社	8%	望月荷継所	1%
芦田分社	8%	大門荷継所	3%
和田分社	8%	和田峠荷継所	5%
腰越荷継所	1%	上丸子荷継所	4%
高梨荷継所	1.5%	上本入荷継所	1.5%

出所：小山家文書明治15年(1882年)11月11日「小諸組中牛馬会社申合規約」により

社の会社名で、正式に太平洋側から日本海側間の長距離輸送継立網を構築する役割を果たすこととなった。

3. 中牛馬会社が取扱う荷物輸送の実態

明治20年代は、銀本位制実施を前提とする企業勃興が起り、日本産業革命の開始期とも言われる。これ以前の時期、中牛馬会社が取扱う荷物の種類と数量を見ると、産業化以前の市場取扱商品がどのようなものであったのかをうかがい知ることが出来る。

3-1. 荷物運送形態の多様化

中牛馬会社は、創業以来、東京に総扱所を設置するとともに各地の同盟会社に所属する荷扱所を数多く設置させ、その集荷配送網を整備し続けた。各取扱所には運送業務にあたる「中牛馬士」を大量に集め、組織化し、荷主から荷物輸送業務を請け負った。1879年以降、中牛馬

会社の組織再編成が試みられ、運送範囲の拡大に伴う諸制度の整備を行い、荷主の要望や需要に応じた多様な輸送サービスの提供に努力することとなる。具体的には、まず、賃金支払い形式が先払いと向払いの二種類となった。運送時間から見ると、東京～直江津間の「定便」、運送時間を大幅に短縮できる「昼夜兼行便」を开通了。請負形式も自社の「原発請負」と他社からの荷物とを継ぎ立て可能な「通次請負」が提供された。また、荷為替も取り組むようになった。近世から継続した「敷金制度」は荷為替の名称へと変えられ、荷主にとって便宜性の高いサービスを提供しはじめた。運送保険の制度も導入し、けっして少ないものではなかった荷物事故への損害弁償が、次第に円滑に進められるようになる。

3-2. 帳簿から見る荷物の輸送の動向

「1872～1896年小山五左衛門家帳簿文書目録」(表4)によって経営帳簿全体をみると、

表4 明治5～29年小山五左衛門家帳簿文書目録(1872～1896)

番号	年代	表題	発信者	受信者
1914	明治5年8月	東西送状改帳 第一号	三番組小諸中牛馬会社	
1919	明治7年2月より	越後屋荷物請払帳	三番組小諸中牛馬会社	
817	明治7年10月	西荷通送帳	三番組小諸中牛馬会社	
3359	明治7年10月	荷物判取帳	三番組小諸中牛馬会社	
816	明治8年4月	東荷受払帳	三番組小諸中牛馬会社	
1916	明治9年7月	彰真社荷物通送帳	小諸中牛馬会社	
254	明治10年6月	通送物貨駄数取調路線並種類区別書	小諸中牛馬会社	
802	明治11年5月下旬	川上荷請払帳	小諸町中牛馬会社	
815	明治11年11月中旬	長野大連社荷請払帳	小諸町中牛馬会社	
803	明治12年1月中旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
804	明治12年4月下旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
805	明治12年8月中旬	川上荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
822	明治12年11月中旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
819	明治13年1月中旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
828	明治13年3月中旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
821	明治13年5月上旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	

表4 つづき

番号	年代	表題	発信者	受信者
826	明治13年6月下旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
806	明治13年8月下旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
827	明治13年9月	山久荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
807	明治13年10月下旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
818	明治13年12月上旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
1908	明治14年	養蚕荷原発帳	小諸町中牛馬会社	
829	明治14年2月上旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
823	明治14年3月初旬	刻莖請払帳	小諸町中牛馬会社	
809	明治14年4月上旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
810	明治14年5月中旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
830	明治14年7月上旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
824	明治14年9月上旬	長野大連社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
811	明治14年11月中旬 より15年1月まで	長野大連社荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
1910	明治15年	第十九国立銀行為替荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
1921	明治15年	為替荷物受払帳	布施銀行小諸出張所 小諸町中牛馬会社	
831	明治15年11月下旬	三角久荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
813	明治15年12月下旬 から16年1月まで	西行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
1920	明治15年12月下旬	田り藍玉配達帳	大阪田中屋利兵衛 小諸中牛馬会社	
1909	明治16年	諏訪伊那為替付荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
847	明治16年1月8日より	山六藍玉請払帳	手塚六三郎中牛馬会社	
857	明治16年3月下旬	西行小附受払帳	小諸町中牛馬会社	
1917	明治16年4月	電信御用物輸入帳 第二号	小諸町中牛馬会社	
846	明治16年4月中旬	東行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
845	明治16年8月上旬	東行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
862	明治16年9月上旬	養蚕荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
841	明治16年9月下旬	金銭出入帳	小諸町中牛馬会社	
842	明治16年10月中旬	金銭出入帳	小諸町中牛馬会社	
858	明治16年11月中旬	明商社荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
863	明治16年12月上旬	麻豊系受払帳	小諸町中牛馬会社	
848	明治16年12月	金銭出入帳	小諸町中牛馬会社	
849	明治16年12月23日	金銭出入帳	小諸町中牛馬会社	
1997	明治17年2月上旬	買物帳	小諸町中牛馬会社	
1913	明治17年5月下旬より	煙草荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
1907	明治17年7月	阪東講荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
1925	明治17年9月	合薬荷請払帳	小諸町中牛馬会社	
872	明治18年1月中旬	西行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	

表4 つづき

番号	年代	表題	発信者	受信者
840	明治18年3月中旬	東行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
874	明治18年4月中旬	明商社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
844	明治18年5月上旬	西行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
843	明治18年5月上旬	東行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
875	明治18年6月下旬	西行荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
1924	明治18年8月	西行小附配達帳	小諸町中牛馬会社	
1922	明治18年9月	電信御用物配達帳	小諸町中牛馬会社	
1912	明治18年10月11日より	養蚕荷物受払帳	小諸町中牛馬会社	
873	明治18年11月下旬より12月下旬に至り	明商社荷受払帳	小諸町中牛馬会社	
3015	明治18年以降	為替荷物取調		
1915	明治19年1月	紙荷物受払帳	小諸中牛馬会社	
896	明治19年3月上旬	て藍玉受払帳	久次兵三郎 小諸中牛馬会社	
871	明治19年9月	西行小附受払帳	信濃中牛馬会社小諸分社	
1818	明治19年～22年	諸帳簿集計帳		
1948	明治20年	明治二十年度小井川発荷物調		
942	明治21年1月	三角荷物請払帳	帝国中牛馬会社横川分社	
1937	明治21年	請負荷物取調帳		
3017	明治21年	矢鳥社為替荷物取調書		
1900	明治22年	明治22年度第十九国立銀行、第四十国立銀行為替荷物諏訪伊那取扱精算書		
1901	明治22年	22年請負荷物精算書		
1899	明治23年	23年度第十九国立銀行、第四十国立銀行為替荷物諏訪伊那取扱精算書		
1933	明治23年	二十三年度請負荷物精算書		
1931	明治23年	諏訪伊那取扱精算書 二十三年度第十九国立銀行第四十国立銀行		
1934	明治23年	二十三年分下諏訪原発荷物計算書		
1903	明治24年	24年度第十九国立銀行、第四十国立銀行為替荷物諏訪伊那取扱精算書		
1897	明治25年	25年第十九国立銀行、第四十国立銀行為替荷物諏訪伊那取扱精算書		
1906	明治25年	生糸継立帳		
1959	明治25年	明治25年為替荷物取調書	信濃中牛馬会社赤穂支店	小諸中牛馬会社小山恒助
1945	明治25年1月6日	第四十国立銀行保険料取調書	中牛馬小井川支店	中牛馬小諸分社
1955	明治25年12月1日	明治25年為替荷物運賃、保険料調	飯田中牛馬会社請負係 市瀬〇七	小諸中牛馬会社出張員小山恒助
1942	明治25年	十九銀行等為替荷物書上帳	各銀行の記録があります	
1953	明治26年	明治26年荷物運賃、保険料引合書		

表4 つづき

番号	年代	表題	発信者	受信者
884	明治26年	諏訪、伊奈保険請負荷物精算帳		
1938	明治27年	二十七諏訪伊那保険料並びに運賃精算帳		
1898	明治27年	27年各銀行為替荷物取調帳		
1896	明治27年	27年1月より各社貸借帳	小諸帝中諏訪伊那出張所	
1956	明治28年	明治28年度為替荷物調	飯田代理店	帝国中牛馬合資会社
1957	明治28年	明治28年度為替荷物調	赤穂帝中代理店	
1895	明治28年	28年度各原発之帳		
1904	明治28年	各銀行為替荷物之帳		
1961	明治28年か	各社製糸荷物取調書	帝国中牛馬合資会社	下諏訪小山恒助
1958	明治29年	明治29年度為替荷物取調書	小井川帝中	小諸帝中
1962	明治29年か	各銀行為替荷物取調書	小山	小井川代理店
1960	明治29年か	各社製糸荷物取調書	小諸町帝国中牛馬合資会社	下諏訪小山恒助

出所：筆者によって作成した「小山五左衛門家文書目録」により作成

創業年1872年8月から1878年会社が経営困難期まで、荷物運送に関する帳簿が11冊残されている。しかし、1879年貨物運送業が自由営業になってから1881年に中牛馬会社組織が再編成されるまでのわずか3年の間に作成された帳簿が25冊も残されている。とくに「長野大連社荷受払帳」は17冊を数え、もっとも多い。1875年に交代した長野中牛馬会社の頭取中沢與左衛門は、家が旧庄屋であったため、その社会的影響力を通じて長野町の顧客と荷物運送量を急増させることに成功したとも考えられる。さらに1882年以降、1888年までの間には、製糸荷物運送に関連する帳簿の数量が急増している。

帳簿の記帳・記載方式をみてみよう。表4によると、創業期における中牛馬会社の記帳法は統一されていない。しかしそれらには次のような変化を見てとることができる。表3「東西送状改帳」は中牛馬会社が1872年8月に開業して以来、1875年に会社が困難期に入るまでの小諸中牛馬会社が取扱った零散荷物の運送記録である。主として上田と長野各地の町村商人の輸出と仕入荷物であり、「東行」と「西行」を

分けることなく、出入りのみを書き連ねていく大福帳のような記帳法で記載されている。明治6年(1873)の「越後屋荷物」以降、荷受主越後屋の荷物が一冊に纏めて記帳されるようになった。さらに、荷物運送量の増加とともに、明治7年(1874)から「西荷運送帳」、明治8～16年(1875～1883)「東荷受払帳」にみられるような、荷物の運送方向によって東西を分けて記帳するような記帳方法へと変わっていく。さらに、明治9年(1876)「彰真社¹¹⁾荷物受払帳」

11) 彰真社は当時長野県の為替方である。彰真社についての説明は以下になる「南佐久郡穂積村の生糸商黒沢鷹次郎、伯父黒沢伴次郎、同郡前山村の大地主早川重右衛門、北佐久郡岩村田村の豪商阿部万五郎らとともに、翌八年上田町に事務所を設けて、国立銀行条例に基づく銀行の設立運動を開始した。(中略)

そこで黒沢らは、上水内郡の小坂善之助、上高井郡の牧新七ら北信の有力者とはかり、九年六月、長野県に彰真社(信濃銀行の前身)を設立し、小野組に代わって長野県為替方としての業務を引継ぐことになった。」山口和雄『日本産業金融史研究 製糸金融篇』東京大学出版会、1966年 77ページ

から各地の長野県と群馬県下各地の中牛馬会社と彰真社の間に為替荷物を運送する契約を結び、同一出荷主の荷物については単独に記帳し始めた。その後明治11～15年(1878～1882)「長野大連社荷請払帳」、明治13年(1880)「山久荷物受払帳」、明治15年(1882)よりの「三角久荷物受払帳」などでは、長野、上田地方の有力商人あるいは商人連合組織の仕入荷物について、単独に記帳するようになった。また明治15年(1882)から「田り藍玉配達帳」、明治19(1886)年から「て藍玉受払帳」、明治16(1883)年より「山六藍玉請払帳」などの長野県下の各商人へ運送する東京、大阪、高崎の商人荷物を、こんどは店ごとに単独記帳するようになった。また、明治11～12年(1878～1879)の「川上荷請払帳」、明治14～16年(1881～1883)「養蚕荷原発帳」、明治14年から「刻苺請払帳」、明治16(1883)年から「麻豊系受払帳」、明治17(1884)年「合葉荷請払帳」、明治19(1886)年よりの「紙荷物受払帳」などは、荷物の種類によって単独記帳している帳面である。そのほか、明治16(1883)年以降の「電信御用物配達帳」のような公的荷物、明治16(1883)年以降の「西行小附受払帳」のような「戻り荷」や臨時請負小荷物などの特別の荷物も、それぞれ単独記帳するようになった。なお、明治15(1882)年以降、特に明治20(1887)年前後より伊那諏訪地方の製糸荷物を運送する帳簿¹²⁾が圧倒的に多くなる。これらの帳簿記録方法の変化は、商品流通の発展とともに中牛馬会社が取扱う荷物の量と種類が拡大しつつあったことに対する帳簿上の対応である。東西荷物仕分け、特定荷主仕分け、特定の荷物による仕分けなど、単独の記帳方式が次々導入されるのも同様の対応であるといえよう。他方で、明治20(1887)年代からは諏訪の器械製糸業勃興に対応して、

12) この目録では帳簿はまだ完全ではなくて、年代を確認できる分だけ取り上げた。

小諸中牛馬会社の運送業務が、諏訪伊那地方の製糸荷物と養蚕荷物の運送を中心とするものになっていることを確認することが出来る。

3-3. 年代別に見る小諸中牛馬会社取扱荷物

次に、1872～1881年までの小諸中牛馬会社の帳簿記録によって、年毎の荷物運送の実態を明かにする。この期間の連続的史料は存在せず、断片的に残されたものだけであるが、可能な限り史料に即しながら、荷物の輸送実態を説明してみる。

まず、帳簿史料全体をみると(表4)、1878年末までの輸送を記録した帳簿は10冊である。まず、明治5(1872)年8月の中牛馬会社開業から明治11(1878)年までの記録であり「東西送状改帳」、明治6(1873)年の越後屋荷物受払帳、明治7(1874)年10月～明治8(1875)年11月までの「荷物判取帳」の合計三冊がある。さらに、明治7(1874)年10月～明治8(1875)年の「西荷通送帳」、明治8(1875)年4月～5月の「東荷受払帳」、明治9(1876)～明治10(1877)年「彰真社荷物通送帳」、明治11(1879)年「川上荷受払帳」、「長野大連社帳」などの帳簿がある。その中で「東西送状改帳」には赤字で「第一号」、「西荷通送帳」は赤字「九番」、「東荷受払帳」は「二十番」と標記されているが、この番号については、後代帳簿を整理する際に便宜的に標記した帳簿番号なのか、それぞれの種類の帳簿の連番番号なのかは不明だが、いずれも揃いの番号ではないことだけは確かである。

明治5年(1872)における中牛馬会社開業後の荷物運送状況は、「東西送状改帳」(表3)によってしか確認できない。この帳簿には、明治5(1872)年～11(1878)年の記録が残されているが、同じ時期のほかの帳簿と対照すると、記載データ数はかなり少ないため、この帳簿は当該時期全体の記録ではないことが分かる。9月から12月の間に運送した荷物は総計199個、

3 駄 10 俵 70 本 20 樽 2 包 3 袋 1 通である。この中では明治 5（1872）年の 4 ヶ月間に運送した主な荷物は長野地方産物の繭類と畳糸と砂糖類である。出荷地と荷受地を見ると、上田地方からの出荷件数が 32 件でもっとも多い。次は小諸地方 13 件、高崎 4 件、長野 2 件、東京は 1 件である。出荷地に対して荷受地では高崎、倉賀野を中心とする上州地方は 31 件でもっとも多かった。次は上田 6 件、東京 4 件、武州 3 件、大坂 2 件、小諸 1 件であった。そして、荷受主では、倉賀野河岸の舟運同盟社のもとへと運送したものが 10 件で最多である。馬車会社で継ぎ立てたのは 1 件だけである。明治 5（1872）年の時点では、創業したばかりの中牛馬会社が取扱う荷物の量は、当該地域の市場経済化の度合いに応じ、それなりに少なかったのである。

明治 6（1873）年の運送荷物記録を見ると 169.5 個 8 俵 4.5 駄 23 箱 11 本 1 貫である。総数的には明治 5（1872）年の 4 ヶ月間より減っているが、同年のもう一つの帳簿「越後屋荷物受払帳」を見ると、生糸類の荷物の量が明らかに増えていることが確認でき、前年に引き続き繭類荷物が多かったことがわかる。同年は、越後屋の荷物を東京、横浜まで運んでおり、ほとんどが生糸類である。この記録は、正式な契約を結んだことが確認できないのだが、当時の越後屋はすでに主要な生糸売込商であり、生糸だけではなく真綿、出売繭、熨斗糸、繭、蚕種などの蚕糸関連荷物が多量に運送されている。生糸荷物輸送に関する書状、小包等の運送もしている。

明治 7（1874）年から、帳簿記録は「西」と「東」に分けて記載するようになった。この時点では「東荷」は小諸以東からの荷物を意味する。「西荷」は小諸以西からの荷物である。この帳簿は、明治 7（1874）年 10 月 6 日～12 月 14 日の 2 ヶ月間の「西荷通送帳」と明治 8（1875）年 4 月 7 日～5 月 9 日の 1 ヶ月間の「東荷受払帳」という二冊である。出荷主、受主、運送馬士、荷物の品名、数量、継立会社名などは

ほとんど詳細的に記録されている。まず、明治 7（1874）年 10 月～12 月の「西荷通送帳」によると、運送荷物の件数は 610 件である。出荷地は、長野、上田、小諸、松代、松本、諏訪など信州各地におよぶ。特に長野地方は 81 件、上田地方は 119 件、小諸地方は 63 件と、出荷数が多い。この三ヶ所のほかに南信の松本は 10 件、諏訪 2 件が目立つ。なお、長野県下の松代、布施とその他の村々からも出荷されている。さらに、越中、越後の中牛馬会社の分社と陸運会社から運送監督を依頼された荷物もあった。越中は 17 件、越後は 20 件である。その荷受地を見ると、これらの荷物は小諸以西の佐久郡の各地、上州の各地、武州、甲州、野州、東京、横浜等の各地へと運送している。高崎までの荷物は 165 件と最も多い。東京までは 129 件、上州各地まで合わせて 278 件である。信州佐久

表 7 明治 9、10 年彰真社荷物数統計（1876、1877）

年	月	馬士へ 依頼数	荷主から 依頼件数	荷物品数
明治 9 年	7 月	18	24	175
	8 月	52	73	429
	9 月	48	59	402
	10 月	20	31	151
	11 月	14	20	95
	12 月	15	19	145
	合計	167	226	1,397
明治 10 年	7 月	4	8	39
	8 月	17	18	80
	9 月	25	27	198
	10 月	21	31	118.5
	11 月	1	1	10
	12 月	0	0	0
	合計	68	85	445.5

出所：小の家文書明治 9 年（1876）「彰真社荷物受払帳」により作成

郡各地までは計 198 件である。岩村田、軽井沢、野沢などの佐久郡の町村へは 198 件ほど運送している。いわゆる「西荷」の受地は高崎を中心とする上州の各地と岩村田、白田、野沢を中心とする佐久郡の各地、または東京の各地である。高崎と倉賀野は、中牛馬会社取扱荷物を馬車と舟運へ継ぎ立てるための拠点である。

次は明治 8(1875)年 4 月 7 日～5 月 9 日の「東荷」を見よう。運送件数は 610 件である。東京各地、上州は高崎を中心とする各地、また小諸を含めて佐久郡の村々から出荷している。その中に確認できた東京からの出荷件数は 112 件、高崎を中心とする上州各地の出荷件数は 217 件、また小諸、岩村田、白田、野沢の各地を中心とする信州佐久郡からの出荷件数は 107 件、越後高田社中持件数は 24 件、甲州と武州からの出荷件数はそれぞれ 1 件と 5 件である。

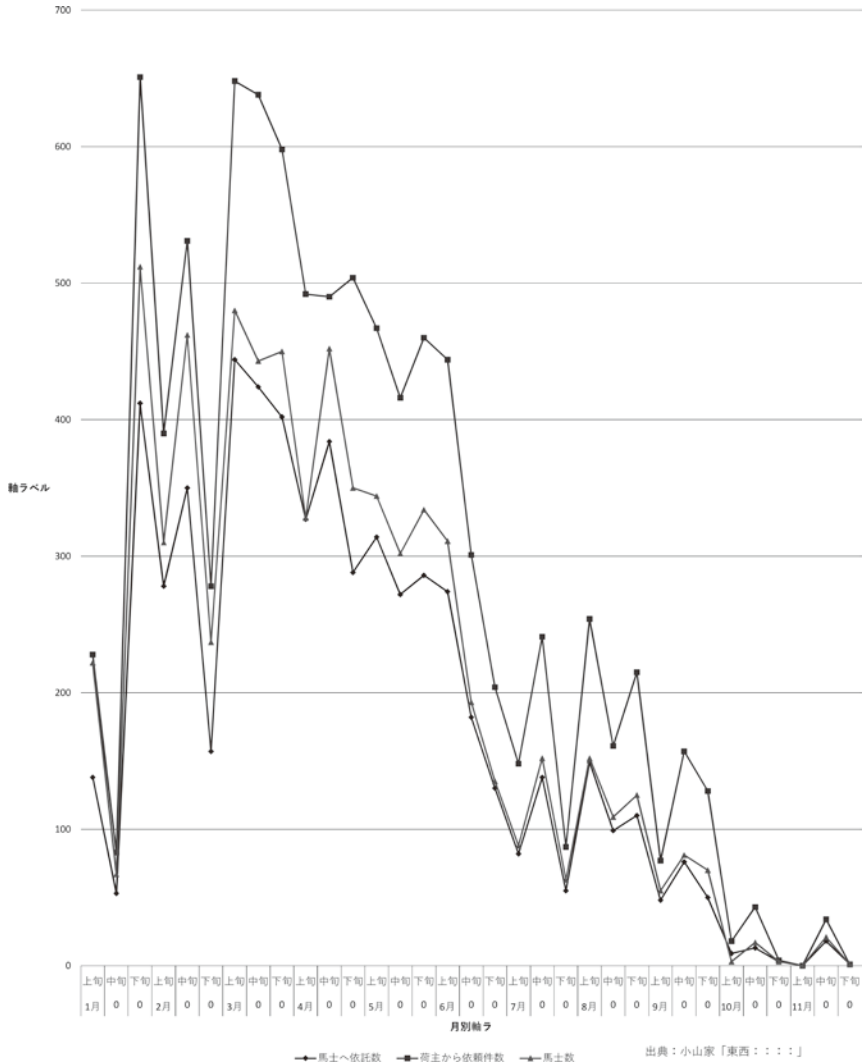
最後に、運送に当たった中牛馬士について見ておこう。明治 8(1875)年 1 月～11 月までの一年間、小諸中牛馬会社の荷物運送用いた中牛馬士人数、および中牛馬会社から中牛馬士へ荷物輸送の依頼件数は次のようなものであった(グラフ 1)。この間、荷主から依頼された件数は 9,391 件であって、中牛馬会社はこれらの荷物をまとめて中牛馬士に依頼する。その件数は 5,966 件であった。12 月を除いて毎月平均して、荷主から 854 件、中牛馬士へ 542 件依頼している。荷主は毎日平均 26 件依頼があり、そのうち 18 件を中牛馬士へ依頼した。しかし、全体の運送件数は、その増減の季節的波動がかなり激しい。1 月下旬がピークになっているが、2 月の下旬は激しく減り、3 月の中旬はまた増大ピークをみせ、4 月以降減少の一途を辿る。6 月にはいと著しく減少し、300 件以下ないし 100 件以下にまで減っている。さらに 12 月の記録は空白となっている。同年 6 月、各地の陸運会社が解散し、内国通運会社に統一された。これが 6 月以降の荷物輸送量に影響を及ぼしたと考えられよう。中牛馬会社の運送業務の一

部が内国通運会社に奪われた可能性が高い。また国内不況と西南戦争の影響も考慮されるべきであろう。

明治 9(1876)年からの荷物運送の全体記録は揃っていないが、前述の同年 7 月 17 日からの彰真社の荷物通送帳が残されている。彰真社と契約した(史料 1)のは、長野、上田、小諸、松井田、高崎などの各地の中牛馬会社であった。長野、上田方面から出荷した生糸類荷物を倉賀野河岸まで陸送し、倉賀野河岸の舟運同盟業者に委託して東京堀江町三丁目で水揚げし、東京中牛馬会社が彰真社に届けるというルートだった。1876 年、1877 年の両年ともに 7 月～12 月の運送記録(表 7、表 8)である。明治 9 年 8 月、9 月の運送件数と品数は明らかに多かった。実際に確認できる運送荷物は、ほとんどが彰真社が荷為替を取り込んだ生糸荷物である。荷物の品数は 400 以上だったが、ほかの月の記録では荷物品数が 200 個をこえることはなかった。

中牛馬会社と彰真社の取引契約(史料 1)は小山家史料の中で初めて確認できた契約書である。同じ顧客から長期的安定的な契約取引が結ばれた事例である。中牛馬士の手配もある程度安定して予想できたものと考えられる。この年まで蚕種、繭、生糸、屑類などの運送機会が分散的に発見されており、1873 年「越後屋受払帳」には生糸類荷物がまとめて記載されているものの、正式な契約を行った形跡がない。だから、この彰真社との間で結んだ取引契約が長期的で安定した最初のものであったと考えられ、これによって中牛馬会社は長期的な経営見通しが可能となった。またこの契約は中牛馬会社が金融機関と結んだ初めての為替荷物運送契約でもあった。特に生糸のような高価な貨物は安全に運送するかぎり、高額運賃と手数料に加えて損害補償金いわゆる保険金益を得ることもできる。

グラフ 1 1875（明治 8）年 1～11 月小諸中牛馬会社荷物運送統計



【史料 1】

長野県為替方彰真社ト中牛馬会社ト荷物運送
取扱ノ儀ヲ約定セシ故ニ左ノ件々ヲ結約セリ

第一條 彰真社ハ生糸其外荷為換ヲ取組其荷
物ハ中牛馬会社江向運送可致事

第二條 中牛馬会社ハ右荷物之ヲ請取直ニ運
送シ倉ヶ野川岸須賀善衛江送状
日限通運滞ヨリ受取証取置後日異論無
之様注意可致事

第三條 中牛馬会社ヨリ倉ヶ野川岸マテ荷物
運送賃其物品ト日限りニ依テ賃金ノ差
等之アルニ付概ネ書目ヲ以予定スル事
左ノ如シ

生糸 生綿 壱駄目方四拾五貫目迄
此賃金貳円拾八錢也
但シ此内金拾八錢也弁償ノ補ヒ備置事
中略

表 8 明治 9, 10 年彰真社荷物運送明細 (1876 ~1877 年)

荷物名称	明治 9 年 (1876)	明治 10 年 (1877)
生糸	1,201	390
まゆ	8	—
きびそ	38	—
桐油	2	—
小付	4	8.5
蓮包	1	1
油紙包	6	1
洪紙包	—	1
人参	—	6
荷物	9	

出所：小山家文書明治 9 年 (1876) 「彰真社荷物受払帳」により作成

右之諸荷物出発ノ日ヨリ倉ヶ野川岸迄五日切タルヘシ

但シダラ荷ノ儀ハ此限ニアラス

第四條 右荷物中牛馬会社江請取運送途中濡レ痛ミ或ハ火盜難等之アルトキハ其責中牛馬会社ニ速ニ償弁セシムヘシ

第五條 故ニ中牛馬会社ハ送達ノ上案内ニ随ハス荷物運送怠ルカ又ハ引負等生スルトキハ中牛馬会社受負人並ニ保証人ノ所有物ヲ押テ之ヲ弁償セシムヘシ

第六條 中牛馬会社ヨリ倉ヶ野川岸迄運送賃金ハ中牛馬会社ニテ取換置其概金ヲ月末ニ至リ彰真社ヨリ受取然シテ年尾ニ決算可致事

第七條 彰真社荷物受払ノ際雨中カ又ハ泥路荷込ミノ節自然疎漏ノ取扱之ナク為しめて上田会社ニ拾テ示談ノ上瀧澤利兵衛方ニテ取扱可申事

右之條々結約シタル証トシテ左ノ運署者各其姓名ヲ自記シ且調印シテ為所〇置所相違無之候也

明治九年七月十一日

長野県為替方彰真社頭取

早川重右衛門 印

前島清次郎 印

長野中牛馬会社頭取

山極慎吾 印

中澤与左衛門 印

上田町荷物取扱掛書留書記兼瀧澤利兵衛 印

上田中牛馬会社頭取滝沢助右衛門 印

副頭取保証人兼伊藤九右衛門 印

小諸中牛馬会社頭取小山五左衛門 印

副頭取保証人兼中村幸兵衛 印

松井田中牛馬会社頭取大河原義三郎 印

副頭取保証人兼小林利平 印

高崎中牛馬会社頭取矢鳥八郎 印

高崎中牛馬会社々中保証人 白石嘉平 印

(出所：長野県小諸市小山五左衛門家文書)

ところが、1877 年の運送量は 1876 年よりかなり減少している。1876 年～1877 年の間、特に 1876 年の荷物の運送記録については、この一冊しか存在していない。これは運送荷物がそれほど多くはなかったためではないかと思われる。1875 年後半と同じように、内国通運会社創立の影響や不況の影響によって生じた中牛馬会社の経営状況だったと考えたい。

1875 年の「会社御用留」(史料 2) からは、当時の軍需物資の運送も読み取れる。1876 年 1 月 8 日に東京八丁堀高地町小泉忠兵衛という人物が、馬車で高崎中牛馬会社に出向き、東京鎮台御所から鉄砲入御用荷物を東京中牛馬会社へと渡し、高崎中牛馬会社が継ぎ込んで三国街道経由ないし中牛馬会社運送ルート経由で、新潟新発田鎮台御所まで運送するよう依頼している。それに対し、高崎中牛馬会社は、大至急で同盟社の松井田、小諸、上田、長野へと事情を説明し、荷物の規格、重量、運賃などを知らせている。

【史料2】

至急廻達

東京八丁堀高地町小泉忠兵衛殿代仁時八日馬車ニテ至今般東京鎮台御所より越後新發田鎮台御所ニテ御差立ニ相成鉄砲入御用物ヲ受東京中牛馬会社江相渡し其上当社迄継込其上三国通行可及之处同通三国大砲ニテ通路相成兼候段者節候処左当扱無之候ニ付き善光寺通ニテ通行致候事ニ時八日取定各会社継取旨不申上至急之事○当社ニ而取計可出し申し候間御○行可被下候東京より渡○次第先触ヲ差出し申候 継立方之義ハ二〇位ニ継立致候方宜敷江奉存候且仮受取左ニ

記

一 箱御荷物 一箱ニ付

長四尺五半尺 三寸五五分

但し一箱ニ付十七貫より十八貫目迄二箱ニ付一駄致し一里金6錢也従高崎長野まで三十里也

右者今般東京中牛馬会社より相渡ニ相成越後国新發田表迄御差立ニ相成候御荷物右之割合置候荷差之上正ニ御継立可仕候依テ仮証差出申如件

九年一月八日

中仙道高崎駅中牛馬会社 印

(出所：長野県小諸市小山五左衛門家文書「明治8年 会社御用留」)

明治10年から11年(1877~1878)半ばまでの運送状況は、帳簿「逋送路線区別」(表1, 表2)から明らかになる。小諸中牛馬会社に関わる中継荷、原発荷などすべてが記録されている。この帳簿はおそらく公に報告するために作成したのであろう。荷物の品名、数量、出荷主、受主などは記録せず、運送路線と荷物の種類ごとに総量をまとめている。路線全体は、東行、西行と分けて記録し、具体的な運送荷物の単位は「駄」という単位で計算している。この記録は、小諸中牛馬会社において荷物全体について

運送量を「駄」という単位で計算した初出である。1877年6月から1878年5月の間に運んだ荷物の総数は20,469.5駄であった。前述1875年1~11月の中牛馬士運送人次は、6,884次であり、一人が中馬1疋を引いて荷物を運ぶ量が1駄であるとして計算すると、6,884駄である。この一年間の運送量はその3倍以上まで増えたと考えられる。

明治12年(1879)以降については、「長野大連社」の帳簿の存在が目立つ。これは長野町の商人同盟結社であり、東京方面からの共同仕入、共同出荷が明治14(1881)年まで行なわれている。1881年「長野大連社」の荷物運送数は5,053駄であったが、それ以降の記録はない。かわって「明商社」などの新しい結社の名前が記載されるようになる。おそらく「長野大連社」が解散して、新しい結社へと再編成されたのであろう。1882~1883年の一年間に小諸中牛馬会社が取扱う荷物の種類と数量(表9)からみれば、養蚕類は3,003駄であり、5年前より二倍以上に増加した。織物類は2,356.9駄で3倍以上に増えた。ことに小間物類550駄、荒物類900駄などの生活用品の著しい増加が確認できる。また、陶器類、蠟類、石灰類、肥料類など、5年前の統計には存在しなかった商品も多く増えている。

以上、年代別に見てきたが、荷物の運送量、荷物の品種、荷主の人数、運送範囲などが著しく拡大しつつあったことを見て取ることが出来る。全体的には、太平洋側から日本海側方面へと輸送される荷物の量は、日本海側から太平洋側へと輸送される荷物の量よりかなり多かったことが判明した。特に小諸以東から小諸以西へと輸送される荷物の量の多さが目立った。

3-4. 中牛馬会社の取扱荷物の内容について

前述のように、小山家の諸帳簿では、荷物の運送路線は「東行」と「西行」または「東荷」と「西荷」とに分けて記載されていた。それは

表9 1882年7月～1883年6月1年間第二部中牛馬会社小諸組荷物運送詳細表

物品	小諸会社		望月荷継所		上丸子荷継所		腰越荷継所		和田分社		軽井沢荷継所		和田峠荷継所		芦田荷継所		借宿荷継所	
	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)	駄数 (駄)	口数 (口)
公用物	56	42	11	11	3	3	7	2	21	6	21	6	21	6	232	184	5	13
養蚕類	3,003	1,522	5	7	40	30	4	1	92	28	102	28	102	28	137	131	6	24
織物類	2,357	2,285	3	2	20	25	4	1	121	25	121	26	121	26	6	47		
綿類	500	325			100	90	4	1	56	30	91	36	91	36				
麻類	949	674			2	2												
古着類	60	47			3	3			14	10	14	12	21	12				
紙類	190	258							15	9	15	9	15	9				
金物類	323	245	5	17	3	4			28	35	28	35	28	35	4	4	2	3
荒物類	900	866	7	10	14	15			20	12	20	12	20	12	20	20	19	81
小物間類	550	590							170	51	177	61	177	61	1	1		
薬種類	223	195	1	1	1	2			12	18	12	18	12	18	13	24	8	16
藍玉類	827	712	14	8	15	15									15	13		
陶器類	271	389	17	22	10	12	4	2	226	150	226	150	226	150	13	14		
蠟類	114	87																
飯田産物	277	229	17	15	21	25	3	1	230	55	230	55	230	55	215	358	53	176
砥石類	130	92			5	25			30	8	30	8	30	8	8	7		
穀物類	136	98	4	12	107	90	3	2	91	44	91	40	91	40	50	50		
魚類	2,511	1,990																
酒類	26	22																
油類	198	149			13	13									41	43		
茶類	88	48	2	3	6	10	2	1	46	12	46	13	46	13	6	18		
煙草類	611	503	13	15	10	15	5	2	178	38	178	38	178	38	71	84		
乾物、青物類	162	211	2	3			9	4	15	12	15	12	15	12	25	25	99	198
漆類	8	6	11	14			2	2	7	5	7	5	7	5	4	4	1	4
材木類	265	221															141	488
樽木類	17	12			5	5	1	1	44	38	44	38	44	38	41	7		
寒天	46	31	16	4					24	8	24	8	24	8				
石吹類	101	65							40	9	40	9	40	9				
肥料類	47	27																
砂糖類	3,297	2,891	3	4	5	10	4	2	17	12	17	12	17	12	4	5		
笠類	151	224	20	47	52	92	4	2	249	265	249	265	249	265	112	148	15	57
雜品	5,547	6,917																
合計	23,936	21,973	155	200	487	486	48	21	1,746	880	1,746	849	1,563	849	1,016	1,187	348	1,060

※上丸子、腰越、借宿三荷継所のデータは明治161月より6月までである。※軽井沢の貨物口数記録がない。
出所：長野県小諸市小山宗一所蔵小山家文書「荷物運送表」により作成

小諸を境にして、東からの荷物は「西行」あるいは「東荷」を意味する。西からの荷物は「東行」あるいは「西荷」を意味するものであった。

「西荷」、 「東荷」それぞれの荷物運送の中身の詳細は明治7（1874）年10月6日～12月14日の2ヶ月間の「西荷通送帳」（表10）と明治8（1875）年4月7日～5月9日の1ヶ月の間の「東荷受払帳」（表11）という二冊の帳簿を見よう。「西荷」は総計1,518個47駄12俵24樽18箱44本11丁3束33玉である。「西荷」の出荷地は越中富山、越後高田、長野、松本、上田、松代、稲荷山、小諸、常田村、塩尻村などの小諸以西の地域からである。荷受地は小諸、軽井沢、追分、白田、岩村田、野沢八満村、塩野村、上州の松井田、下仁田、高崎、富岡、安中、前橋、桐生、甲州の甲府、韮崎、野州の足利、武州の本庄、熊谷、埼玉、深谷、東京、横浜などの小諸以東の地域である。「東荷」総計は1,790個14駄50俵70樽79樽71箱448束102丁6櫃2枚6品5拵2梱4丸である。出荷地は東京、高崎を中心に松井田、富岡、川越、熊谷、岩村田、追分、安中、野沢、白田、五料村、発地村などの小諸以東の地域である。荷受地は上田、浦野、松代、松本、長野、小諸、小布施村、塩尻村、稲荷山、越後高田、越中新川などの小諸以西の地域である。

運送した荷物の内容は、主として荷物の包装形態と荷物の実物名によって区別され、記録されている。包装形態は、ここでは包類、瓶・樽類、箱・櫃類と分類されている。「包類」がもっとも多いのだが、実際には菴包、紙包、渋紙包、油紙包、琉球包、風呂敷包、麻袋、麻包などさまざまな材料で梱包された荷物であった。石油、水油、酒のような液体荷物は、樽や瓶の形態で運送した。また荷物を箱・櫃に入れる場合もあった。さらに、籠、行李などもあった。これらの中では、菴包が多く見られる包装形態である。数量はずっと圧倒的な量を示している。この包類の荷物の中身については、ほとんど記録され

ることはない。記録はごく少数事例ではあるが、さまざまな荷物内容を示している。たとえば、帳簿類、書物、鉄物、茶などである。雑多な種類の荷物を、これらさまざまな材料で包装し、「包類」として一括して輸送したものと考えて良いだろう。包装材料のサイズもさまざまであった。箱、櫃類の荷物をこれらの材料を用いて包装した記録も少なからず見いだされる。

荷物の実物名だが、「東荷」では、魚介類82個8俵16箱、砂糖類66個3駄8俵31樽3拵3箱、農具類46個100丁70本、綿荷80個16本、塩類74個7駄20俵、楮類435束、砥石類13個560丁などの荷物が、数量的に多い。その中で、楮類と砂糖類の運送詳細を表12、表13によって見よう。表12では楮類は上州村々の商人から上田町商人へ運送したことが分かる。楮は和紙の内山紙製造の原料として知られているが、この時期に特に注目したいのは、蚕卵原紙の製造に欠かせない原料類である。上田地方は蚕種の主要産地であり、横浜方面に多く輸送されると同時に、楮のような蚕卵原紙の製造原料の調達も盛んであった。砂糖類は、持続的に大量に輸送されている貨物である。その主要な出荷主は東京の百足屋、高崎の釜屋勘兵衛と三河屋茂兵衛であった。

「西荷」では、油類27個39駄3樽1本、桑苗・桑種類81個5駄、杏仁類51個5俵、葉種・合葉類70個、数の子60個が多い数量を挙げられた。1ヶ月間だけの記録なので、それまで代表的であった荷物繭類と蚕種類の数量は少ない。これらの荷物の中で、油類、葉種・合葉類の詳細について、表14、表15によって見ておこう。油類とくに種水油類の主要な出荷主は長野玉川屋栄二郎、井桁屋庄七、小布施の角屋藤兵衛であり、主要な受主は追分の大黒屋平平、下県村古屋国太郎、野沢駅井幹屋市兵衛、三嶋屋正一郎、白田駅長屋傳治、大槌屋宇内などの南佐久郡にいる商人であった。種水油は照明用の重要な燃料であり、長野県内で大量に取引さ

表 10 1874 年 10~12 月小諸中牛馬会社「西」荷物運送詳細

荷物名	数量	出荷地	荷受地
筵包	302 個	松本, 長野, 上田, 松代, 小諸, 越中上市, 新川	高崎, 軽井沢, 岩村田, 白田, 下仁田, 足利, 伊勢崎, 甲州, 前橋, 本庄, 埼玉, 甲府, 原市, 倉賀野, 深谷, 東京
油紙包	38 個	長野, 上田, 松代, 小諸, 戸倉, 川中島, 石川村	児玉郡, 高崎, 小諸, 東京, 原市村, 横浜, 沓掛, 志賀村, 伊勢崎, 野沢, 岩村田
紙包	37 個	上田, 長野, 塩尻村	内山村, 岩村田, 野沢, 高崎, 前橋, 東京
渋紙包	46 個	上田, 稲荷山, 水内郡南堀村, 式部村, 小諸, 長野	軽井沢, 小諸, 岩村田, 田之口, 桐生, 松井田, 安中, 高崎, 原市, 横浜, 野沢, 東京
琉球包	37 個	富山, 上平村, 上田, 赤坂, 長野, 小諸	富岡, 八溝村, 野沢, 岩村田, 白田, 高崎, 東京
風呂敷包	6 個	上田	富岡, 追分, 高崎
蘆包	6 個	上田, 富山, 長野	高崎 東京
ほかの包類	22 個	上田, 松代, 塩尻	白田, 軽井沢, 岩村田, 前山村, 高柳村, 本新町村, 高崎, 野沢, 東京
樽類	7 個	上田, 長野	富岡, 高崎, 東京, 岩村田, 追分
小付	18 個	諏訪郡, 高田, 松代, 上田, 越中上市, 新川県	前山村, 小田井, 高崎, 倉賀野, 東京
箱荷	8 個	高田, 松本, 長野	松井田, 高崎, 東京, 岩村田, 下平村
種水油, 油類	27 個 39 駄 3 樽 1 本	長野, 布施村	野沢, 追分, 岩村田, 下県村, 白田, 沓掛, 宿岩村
金物	14 個	富山, 上田, 海野村	高崎 長土呂村
砂糖類	4 個 5 樽	越中 上田	小諸, 岩村田, 松井田
薬種・合薬類	70 個	越中, 高岡, 高田, 松本, 小諸, 長野, 松代	高崎, 東京, 白田, 松井田, 横浜
板類	36 個	上田, 長野, 下県村	追分, 高崎, 桐生, 足利, 東京, 京都
刻	22 個	松本, 長野	高崎, 倉賀野, 柳宿, 前山
帳面類	4 個	長野, 常田	高崎, 岩村田
綿類	9 個	上田	白田, 松井田, 柏木, 野沢
桑苗・桑種	81 個 5 駄	高井郡井上村, 上塩尻村, 矢代, 長野, 松代, 塩尻	三崎, 平沢, 甲州, 下仁田, 葦崎, 本新町村
数の子	60 個	上田, 長野	田之口, 坂本, 野沢, 岩村田, 高崎, 富岡, 安中, 葦崎
魚介	21 個	上田	岩村田, 富岡,
杏干・杏肉・杏仁	51 個 5 俵	長野, 小諸	安中, 高崎, 東京, 倉賀野
果実類 (葡萄, 柿)	11 個 8 箱	塩田町, 上丸子, 長野	追分, 高崎, 松井田
蓮根	5 個	上田	岩村田, 追分
人参種	5 俵	上田	岩村田
松茸・椎茸	39 個	諏訪郡南大原村	高崎, 松井田, 東京

表 10 つづき

荷物名	数量	出荷地	荷受地
麦・蕎麦	28 個 2 俵	塩尻, 大笹村, 阿波町	松井田, 富岡, 熊谷, 高崎, 五科
表類	36 個 1 枚 2 駄	長野	高崎, 富岡, 甲府
艾	37 個	長野	高崎, 東京
笠	39 個	高田, 更級郡水野村	坂本, 岩村田, 安中
椀	3 箱	上田, 小諸	安中, 富岡
瀬戸物	7 個	上田	白田, 平塚
釜	5 個	上田	野沢, 筒井
蚕種	2 個		東京
繭	6 個 3 本	松本	松井田, 高崎, 前橋, 相生, 藤塚
生糸	8 個		高崎
真綿	2 個	長野, 上田	岩村田, 高崎
太物・布	2 個	上田	松井田, 高崎, 東京
茶	4 個	上田, 長野	高崎, 平賀
籠類	6 個	上田	富岡, 追分, 高崎
鍬	20 個 10 丁 3 束	上田	猿久保, 野沢
荷物	160 個	上田, 長野, 高田, 小諸	軽井沢, 田之口, 高崎, 前橋, 倉賀野, 東京, 松井田, 追分, 横川
茴香	14 個	松代, 長野	高崎, 東京
紙荷	20 個	上田	岩村田
畳糸	1 個	常田村	
酒	2 個	上田	坂本
蠟	1 個	上田	富岡
石炭油	1 駄	長野	平賀
雑貨類	7 個 1 丁 1 枚	上田, 長野, 高田, 小諸	坂本, 高崎, 倉賀野, 東京
その他食品類	2 個 2 樽	小県郡和子村	松井田, 高崎
輪嶋か	13 個 3 箱	上田	佐久郡大日向村, 海瀬村, 下仁田, 岩村田, 高崎, 富岡
明荷	11 個	長野, 上田	東京, 高崎, 甲府
不明荷物	127 個 40 本 10 樽 4 箱	上田, 松本, 長野, 小諸	軽井沢, 岩村田, 追分, 白田, 野沢, 長土呂村, 五科村, 松井田, 高崎, 草津, 下仁田, 倉賀野, 東京
合計	1,518 個 47 駄 12 俵 24 樽 18 箱 44 本 11 丁 3 束 33 玉		

注：単位「個」は荷物名の単品の数量ではなく、帳簿で記録されたまとめた荷物の数量である。

出荷地、荷受地に表示されている地名は帳簿で記録された地名である。その他に記録されていないところもある。

出所：長野県小諸市小の家文書「西荷通送帳」（1874 年）により作成

れ、消費されていた。合薬・薬種類は合薬が越中高岡や大泉の出荷であり、和薬は高田会社からの出荷だった。最も数量の多い薬種は小諸の

商人柳田五兵衛から出荷された。受主のほうは商人か何人があるが、主として高崎と倉賀野の舟運業者であったが、おそらく仕向先は東京で

表 11 1875 年 4~5 月小諸中牛馬会社「東」荷物運送詳細

荷物名	数量	出荷地	荷受地
紙包	23 個	高崎, 東京, 小諸, 中込村	上田, 塩尻村, 長野, 松本,
油紙包	24 個	八満村, 馬瀬口村, 高崎, 東京	諏訪, 上田, 長野, 高田, 松本, 飯田, 松代
筵包	476 個	追分, 岩村田, 小諸, 安中, 高崎, 東京, 足利, 原市村, 甲州	加増村, 松本, 長久保, 上田, 須坂, 松代, 越後下田端町, 浦野, 長野, 越中, 川中島, 加沢村, 稲荷山, 矢代, 戸倉, 上諏訪, 丹波島, 麻績駅
小付	52 個	高崎, 松井田, 小諸	上田, 長野, 松代, 高田, 関山, 越中
渋紙包	28 個	東京, 高崎, 松井田, 小諸, 塩野村	長野, 松本, 伊那, 高田, 越中新川, 上諏訪
皆川包	5 個	松井田, 後平村, 安中	長瀬村, 上田, 新川, 川中島
琉球包	12 個	小諸, 松村, 中込村, 松井田	飯田, 飯山, 長野, 上田, 松本
麻包	4 個	松井田	野沢, 上田, 長野
糸立包	4 個	東京, 高崎	上田, 戸倉, 松本, 長野
風呂敷包	4 個	高崎, 小諸	上田, 長野, 高田, 余地村, 松本
その他包類	10 個	高崎, 東京	上田, 長野
行李類	2 個	東京	松本, 長野
籠類	2 個	松本	小諸, 上田
箱荷	39 個 1 樽	高崎, 小諸, 松井田, 岩村田, 東京	長野, 松本, 新川県, 小諸, 上田, 松代
樽荷・瓶類	105 個 28 本 4 樽 2 箱 2 拵	下県村, 小諸, 白田, 澤原村, 岩村田, 東京, 高崎, 野沢	松代, 小布施村, 上田, 長野, 田沢, 須坂
魚介類	82 個 8 俵 16 箱	高崎, 東京, 岩村田, 永橋	上田, 長野, 小布施, 松本, 小諸
乾物	3 個 19 箱 4 樽	高崎, 小諸, 岩村田	小諸, 上田, 長野
砂糖類	66 個 3 駄 8 俵 31 樽 3 拵 3 箱	東京, 高崎	上田, 長野, 川中島
笠類	6 個 4 本 2 箱 1 櫃	東京, 高崎, 原市	上田, 長野
茶・茶櫃	25 個 4 本 1 箱 2 樽	東京, 高崎	飯沢村, 塩田新屋村, 飯山, 浦野, 松本, 上田, 長野
曲物	2 個 2 俵	八満村, 小諸	上田
長物	3 個 2 束	東京, 高崎, 松井田	松本, 松代
金物	3 個 10 丁	東京, 高崎	上田, 長野
農具類	46 個 100 丁 70 本	小諸, 追分	長久保, 塩田新町村, 上田, 長野
鉄類	8 個 11 束	東京, 高崎	上田, 長野
鍋・釜類	17 個	東京, 高崎	長野, 稲荷山
楮類	435 束	五科村, 高梨子村, 新井村, 下城村, 新子田村	永井村, 長瀬村, 上田町, 櫻井村
櫃荷	30 個	東京, 高崎, 小諸	上田, 松代, 長野, 稲荷山
椅子	2 個	岩村田	長野
屏風	1 個	岩村田	長野
ガラス	2 個	小諸	長野

表 11 つづき

荷物名	数量	出荷地	荷受地
荷物	126 個 6 品 1 樽	東京, 高崎	越中新川, 松本, 上田, 長野, 関山
板類	30 個 3 箱 1 枚	松井田, 高崎	長野, 松代
栗木	25 個 2 丁	発地村	岩下村, 中之條村
簾	11 個 12 枚	岩村田, 豊岡村	秋和村, 長野, 松代
布類	3 個	高崎	上田
縄・篠巻類	17 個 7 本	東京, 取手村, 野沢村	上田, 長野
麻荷	20 個	丹生村	越中氷見, 田沢, 長野, 高田
綿荷	80 個 16 本	東京	上田, 長野
桑苗, 桑田	14 個 1 枚	安中, 耳江村	田中, 上田, 角道町, 杭瀬下村
野菜類	4 個 2 束	東京	上田, 長野
石板	11 個	東京, 高崎, 松井田, 板橋	長野, 松代, 麻績駅
石筆	8 個 4 箱	高崎, 松井田, 富岡	上田, 松本
石盤	7 個	東京, 高崎	上田, 浦野, 松代
石灰	12 俵	入沢村	上田
砥石類	13 個 560 丁	東京, 田村市, 管所市	長久保, 上田, 上諏訪
太物	12 個	高崎, 川越,	高田, 浦野, 上田, 川中島
線香	8 箱	松井田, 倉村	上田, 富山
天平	1 個 4 本	高崎, 小諸	松本, 上田
その他雑貨類	17 個	深谷, 松井田, 高崎, 岩村田, 安中	麻績駅, 水内郡柿原村, 長野, 芦田, 高田, 松代
桐苗	8 個	松井田	松本, 上田
桐油	2 個	高崎	越中新川
塩	74 個 7 駄 20 俵	松井田, 新堀村, 小諸	芦田, 栗林村, 上田
梅花油	6 樽	松井田	上田
葉・葉種	6 個 11 樽 2 櫃 1 箱	東京	上田, 松代, 長野
ふし	1 個 11 箱 2 樽	小諸, 高崎	上田, 長野
瀬戸	1 個	野沢	上田
晒蠟	2 個	松井田	上田
油類	1 個 1 樽	岩村田, 高崎	上田, 長野
皮類	2 個	高崎	上田
煙草・大麻類	11 個	熊谷, 松井田, 上州甘楽郡小嶋村	河原町, 浦野, 長野
書物	2 個	東京	上田, 松代
紙荷物	15 個 8 俵	高崎, 野沢, 小諸, 新坂村	上田, 長野, 塩尻村, 芦田
不明荷物	133 個 7 樽 14 本 1 駄 4 丸	松井田, 高崎, 東京, 小諸, 岩村田, 安中, 川越,	岩下村, 上田, 長野, 須坂, 松代, 小原村, 松本, 小布施村
合計	1,790 個 14 駄 50 俵 70 樽 79 箱 448 束 102 丁 6 櫃 2 枚 6 品 5 拵 2 梱 4 丸		

出所：長野県小諸市小山家文書「明治 8 年 4 月より東荷受払帳」より作成（1875）

表 12 明治 8 年 4~5 月東荷一楮類運送詳細表 (1875)

出荷地荷主名	荷名	数量 (束)	屋号	荷受地荷主名
高梨子村 利吉	干楮	6	—	永井村 柳屋和四郎
		6		
		12		
		6		
		12		
新井村 源右衛門	干楮	12	—	永井村 柳屋和四郎
上州五科村 中島富五郎		24		
五料村 中島富五郎	楮	6	○卜	上田横町 紙屋藤兵衛
崎田村 黒澤利右衛門	楮	4		
	目楮	18	—	長瀬 丸山延造 長瀬村久保田屋幸助
入山岩之平 上原永吉殿	干楮	6		
松井田松本三五郎殿出	粉楮	5	○泉	上田原町 和泉屋甚三郎
丸治殿出	干楮	3		
中島富二郎殿出		6		
新井村 実五郎殿出		6		
		6		
		6		
		6		
		6		
		12		
		6		
		6		
		6		
		12		
楮		6		
新井山二出		干楮	12	
	—	6		
	—	6		
	—	6		
	—	6		
	上州岩水村塚城明造	6		
下城村 近江屋吉蔵	干楮	3	□太	上田横町 江戸屋道太郎殿行
		12		
		6		
		6		
		6		
		6		
		24		
		6		
		6		
		12		
新子田村 山屋 栄作	干楮	12	—	上田柳町 辰己鉄助
		12		
		6		
		6		
新井山二	干楮	6	—	櫻井村 久兵衛
—		12	—	上田町 和泉甚八
高利○出	干楮	42	—	上田会社
—	楮	6	—	
合計				435

出所：長野県小諸市小山村家文書「明治 8 年 4 月より東荷受払帳」より作成 (1875)

表 13 1875 年 4~5 月東荷一砂糖類荷物運送詳細

出荷主	荷名	数量	屋号	荷受主
大坂屋太助	中糖	1 個	山水	川中島小原 酒屋定次
	無類黒	3 樽		
東京 村山仁兵衛	黒砂	2 樽		
小諸 山屋謙吾	糖	2 駄	—	上源井村堀外作
東京百足屋出十六品江	台安玉	4 個	山小	上田常田村 嶋屋弥三郎
	中糖	2 俵		
	車糖	3 個		
	上白糖	1 個		
	台安玉	2 個		
	無類黒	2 樽		
東京地田直通	白黒□	1 個	—	松代○○や徳二郎
東京握真屋卯吉		2 拵	—	長野丸屋平右衛門
高崎三河屋茂兵衛	灰黒	1 駄	山吉	長野 角太宇兵衛
		1 個		長野 永寿屋太七
		1 個		上田 湊屋新右衛門
	無類黒砂糖	4 樽	カネ大	長野若木屋松藏
	無類黒	4 樽	△久	長野小妻屋萬吉
	台安玉	4 俵		
	白糖	1 個		
	車糖	4 個		
	車糖	4 個		
	車糖	6 俵		
	極上中糖	1 個		
	極上中糖	2 個		
	台安玉	4 俵		
	台安玉	2 個		
高崎釜屋勘兵衛	上糖	2 個	山六	上田横町 枺木屋作右衛門 上田横町 柏木や仙右衛門
	上糖	2 個		
	無類	6 樽		
	無類	4 樽		
	白糖	2 個		
	砂糖	2 樽		
	砂糖	2 樽		
	砂糖	2 樽		
	砂糖	2 個		
高崎 魚屋鉄之助	本別京極	12 個	—	上田海野町 越後屋定吉
高崎会社	砂糖百斤入	12 個	○カ	長野相之木 梅田屋留藏
—	砂糖	2 個	□江	長野 浅野平吉
—	台安玉	2 個	—	
—	砂香	3 箱 1 拵	—	
合計		66 個 31 樽 3 駄 16 俵 3 箱 3 拵		

出所：長野県小諸市小山家文書「明治 8 年 4 月より東荷受払帳」より作成（1875）

表 14 1874 年 10~11 月「西」荷一油類運送詳細表

出荷地荷主名	荷名	数量	屋号	荷受地荷主名
長野玉川屋栄二郎	水油	1 駄	カネ大○	追分 大黒屋恕平
	油	1 駄		
	油荷	1 駄		
	油	1 駄		
□ト出	油	2 駄	◇古	下県村 古屋国太郎殿入
□上出		1 駄		
矢澤塩屋忠助	油	1 駄		
		1 駄		
		1 駄		
小布施角屋屋藤兵衛	油	1 駄	井二	野沢 井幹屋市兵衛殿行
	水油	1 駄		
	水油	2 樽		
	油	1		
	種水油	1 駄		
	油	1 駄		
	種水油	20		
松代	油	1 駄	○井	白田駅 長屋傳治殿行
小布施角屋藤兵衛	油	1 樽		
	種水油	1 駄		
—	水油	1 駄	山三	野沢駅 三嶋屋正一郎殿行
長野井桁屋庄七	水油	1 駄		
	種水油	1 駄		
	油	1 駄	△太	野沢宿 並木新一郎殿行
		1 駄	山サ	野沢 山本栄治郎殿行
		1 駄	□万	岩村田宿 蔦屋宇右衛門殿入
		種水油	5 駄	山山大
	種水油	1 駄		
	種水油	1 駄		
	油	2 駄		
	—	種水油	1	
—	種水油	1		
—	種水油	2 駄		
—	種水油	1		
—	油	2 駄		
か久屋惣兵衛	種水油	2 駄		
—	種水油	1		
志の傳出	油	1 本	—	沓掛 土屋九蔵殿行
中屋善十郎殿出	油	1 駄	—	宿岩村 大丸屋喜代松殿行
—	水油	1 駄	—	野沢駅玉嶋屋彦一郎殿
合計				27 個 39 駄 3 樽 1 本

出所：長野県小諸市小山家文書「西荷運送帳」（1874 年）により作成

表 15 1874 年 10～11 月「西荷」一薬種・合薬類の運送詳細

出荷主	荷名	数量 (個)	受主
	合薬	4	高崎 水谷又右衛門
越中大泉○兵衛殿荷	合薬	2	高崎 水谷又十郎
高岡 松井茂兵衛	合薬	3	高崎 大黒屋九兵衛
	和薬	2	高崎
高田会社出	和薬	2	高崎会社
松本久出	薬	2	白田駅 百足屋勝弥
	薬	1	高崎 柏屋半兵衛
塩田五良右衛門	薬	1	高崎 銀杏屋源兵衛
小諸 柳田五兵衛	薬種	12	高崎田町 山口宗兵衛
	薬種	2	—
	薬種	4	高崎会社
	薬種	4	関宿 木村清兵衛
	薬種	4	関宿 木村清兵衛
	薬種	4	高崎会社 須賀長太郎
	薬種	4	高崎 須賀長太郎
	薬種	6	
	薬種	1	
	薬種	1	
長野 小栢屋傳兵衛	薬種	4	
上田み水○屋新右衛門	薬種	1	高崎 三河屋茂平治
松本 久●出	薬種	1	
小井屋傳之助	薬種	3	高崎会社 須賀庄平
日野屋 儀兵衛	薬種	1	高崎
松代大丸屋惣兵衛	薬種樽	1	高崎
合計		70 個	

出所：長野県小諸市小山家文書「明治 7 年 10 月より西荷通送帳」より作成 (1874)

あったと考えられる。これらの荷主は出荷主か受主である同時に受主と出荷主でもある時がある。この時期の地方商人と東京商人間の貿易は、近世期の地方城下町と江戸間の商品流通の延長で行われていたと考えられ、これらの商人の出荷と仕入れ活動において中牛馬会社のような物流

企業が重要な役割を果たしたのであった。

さらに、この 11 ヶ月間の荷物輸送の詳細を、表 16 によって明らかにしてみよう。荷物の総数は 28,472 個 8,867.5 本 68 駄 1,474 樽 1,050 束 3,296.5 俵 442 箱 63 櫃 92 籠 1,024 品 980 枚 82 段 5 袋 100 丸 1,146 丁 8 包 10 組 30 張 12 櫃で

表 16 1875 年荷物運送明細表

区別	分類	荷物名	数量 (個)	数量 (本)	数量 (張)	数量 (箱)	数量 (個)	数量 (個)	数量 (箱)	数量 (張)	数量 (袋)	数量 (丸)	数量 (門)	数量 (包)	数量 (袋)	数量 (組)	数量 (張)	数量 (個)
農業生産物	食料品	白米・蕎麥	192			30			11									
農業生産物	食料品	米粟類	60	3		6			6									
農業生産物	食料品	野菜類	566	2		252												
原始生産物	水産物	鮭	137			36												
原始生産物	水産物	鱒	77			50												
原始生産物	水産物	田作	40			12												
原始生産物	水産物	魚・鰻魚・干魚	64	73		2			5									
原始生産物	水産物	その他魚類	89	127		42												
原始生産物	水産物	海老	40			12												
原始生産物	水産物	蛤・貝類	4			4												
原始生産物	水産物	海苔・昆布	8			4												
原始生産物	林産物	炭	137	166														
原始生産物	林産物	桐	307			2												
原始生産物	林産物	檜	1,443	30	966	2												
特殊農業生産物	皮革類	桑苗・桑種	339	879					2									
特殊農業生産物	養蚕類	蚕種	53						1									
特殊農業生産物	織物類	綿類	175	181														
特殊農業生産物	織物類	唐綿	64	151					2									
特殊農業生産物	煙草類	煙草	4,793						14									
特殊農業生産物	藍類	藍玉	801	1,097														
特殊農業生産物	織維類	麻	188															
特殊農業生産物	織維類	細美	1,250															
工業生産物第一類	織維類	生糸	1,212	18														
工業生産物第一類	織維類	製糸類	63															
工業生産物第一類	織維類	真綿類	27	12														
工業生産物第一類	製糸類	製糸類	36															
工業生産物第一類	織物類	襪類	798	28														
工業生産物第一類	織物類	下駄	841	93		2,411			2									
工業生産物第二類	織物類	砂摺	38			243												
工業生産物第二類	織物類	塩類	17															
工業生産物第二類	乾物	乾物																
工業生産物第二類	調味料類	調味料類	4															
工業生産物第二類	調味料類	酒	414															
工業生産物第二類	食品類	角天	149															
工業生産物第二類	食品類	粉類	87															
工業生産物第三類	食品類	あん類	155															
工業生産物第三類	食品類	麦	69															
工業生産物第三類	食品類	風呂敷・碁球	466	1														
工業生産物第三類	材木	材木	3,450	161					4									
工業生産物第三類	細工類	細工類	16															
工業生産物第四類	油類	桐油	23															
工業生産物第四類	油類	水油	13	74					64									
工業生産物第四類	油類	石油	4	4														
工業生産物第四類	油類	油	4	9														
工業生産物第四類	油類	燻香	18	3														
工業生産物第四類	蠟燭類	蠟	97	74					42									
工業生産物第四類	油類	水油	13	13														
工業生産物第四類	油類	石油	4	10														
工業生産物第四類	油類	油	4	9														
工業生産物第四類	油類	燻香	3	3														
工業生産物第四類	蠟燭類	蠟	97	13														
工業生産物第四類	油類	水油	13	13														
工業生産物第四類	油類	石油	4	10														
工業生産物第四類	油類	油	4	9														
工業生産物第四類	油類	燻香	3	3														
工業生産物第五類	蠟燭類	蠟	97	13														
工業生産物第五類	蠟燭類	蠟	13															
工業生産物第五類	細工類	竹細工	79	20					1									
工業生産物第五類	細工類	曲物・箕																

表 16 つづき

区別	分類	荷物名	数量 (個)	数量 (本)	数量 (瓶)	数量 (樽)	数量 (束)	数量 (俵)	数量 (箱)	数量 (櫃)	数量 (籠)	数量 (品)	数量 (枚)	数量 (段)	数量 (袋)	数量 (丸)	数量 (丁)	数量 (包)	数量 (袋)	数量 (組)	数量 (張)	数量 (冊)
工業生産物第五類	雜貨類	元結	965																			
工業生産物第五類	漆器類	桐	101																			
工業生産物第五類	雜貨類	飯田産物	3																			
工業生産物第五類	雜貨類	笠類	80	1,176																		
工業生産物第五類	陶器類	瀬戸物	36						8									2				
工業生産物第五類	金物類	金物	201																			
工業生産物第五類	農具類	釜・鍋・鍋	76																			
工業生産物第五類	農具類	鋸・鋸物類	65																			
工業生産物第五類	金物類	鐵	72	1																		
工業生産物第五類	金物類	鐵	149																			
工業生産物第五類	桶樽類	瓶類	93	469																		
工業生産物第五類	雜貨類	明傳	2																			
工業生産物第五類	雜貨類	洋物	6																			
工業生産物第五類	雜貨類	時計	22																			
工業生産物第五類	雜貨類	燧心・打火繩類	3	7																		
工業生産物第五類	雜貨類	蚊帳	28																			
工業生産物第五類	雜貨類	地球	3																			
工業生産物第五類	雜貨類	地球	3																			
工業生産物第五類	道具類	ほかの雜貨	19																			
工業生産物第五類	道具類	同掛	24																			
工業生産物第五類	紙類	紙	682	5																		
工業生産物第六類	文具類	文房具類	29																			
工業生産物第六類	紙類	中折	350	178																		
工業生産物第七類？	車輛類	荷車	310																			
工業生産物第八類？	車輛類	砥石	14																			
工業生産物第八類？	車輛類	石筆	48																			
工業生産物第八類	車輛類	石散	74																			
工業生産物第八類	車輛類	藥種・合葉	107	9																		
工業生産物第八類	車輛類	茶	4																			
工業生産物第八類	車輛類	梅花油	180																			
工業生産物第八類	車輛類	漆紙包	236																			
工業生産物第八類	車輛類	紙包	167																			
工業生産物第八類	車輛類	油紙包	3,887	5																		
工業生産物第八類	車輛類	紙包	21																			
工業生産物第八類	車輛類	麻包	12																			
工業生産物第八類	車輛類	布包	29																			
工業生産物第八類	車輛類	風呂敷包	75																			
工業生産物第八類	車輛類	風呂敷包	28																			
工業生産物第八類	車輛類	珪硝包	185																			
工業生産物第八類	車輛類	笹川包	24																			
工業生産物第八類	車輛類	安平包	28																			
工業生産物第八類	車輛類	その他包	56																			
工業生産物第八類	車輛類	樽・瓶	34	5																		
工業生産物第八類	車輛類	箱	271	117																		
工業生産物第八類	車輛類	籠	126																			
工業生産物第八類	車輛類	荷物	1,515	1																		
工業生産物第八類	車輛類	小付	1,058	2																		
工業生産物第八類	車輛類	明荷	15																			
工業生産物第八類	車輛類	灰類	15																			
工業生産物第八類	車輛類	ふし	29																			
工業生産物第八類	車輛類	ぬし	9																			
工業生産物第八類	車輛類	不明荷物	1,275	155																		
工業生産物第八類	車輛類	不明荷物	28,471	8,868	68	1,474	1,050	3,297	442	63	92	1,024	986	82	5	100	1,146	8	3	10	30	12
合計			28,471	8,868	68	1,474	1,050	3,297	442	63	92	1,024	986	82	5	100	1,146	8	3	10	30	12

注：区別と分類の依拠は「増補 明治前期経済の分析」(山口和雄, 1959年)の第一章「明治七年府県物産表」の分析に参考して筆者が作成した。煙草は列煙草のこと。樽・瓶・箱・籠はそれぞれの容器に入れる荷物のこと。飯田産物は御玉串, 水引のこと。果実類は梨子, 梅, 杏, 葡萄, 蜜柑, 柚子, 柿などのこと。野菜類は茄子, 水菜, にんじん, 竹の子, 椎茸などのこと。

出所：長野県小諸市小山家文書「明治七年 戊戌十月より荷物判取」, 「明治八年 亥三月より荷物判取」, 「明治八年 亥八月一日より荷物判取」により作成した。

ある。包・瓶・樽・箱類の荷物の中身は確認できないので、確認できる荷物の種類と数量を分析したいと思う。これらの荷物の分類と区分は山口氏の「明治七年府県物産表」の分析¹³⁾を参考としながら分析する。これらの荷物の区分は主として、農産物、特殊農産物、原始生産物、工業生産物からなる。海運では米、魚肥料が巨大な運送量を占めていたのに対し、陸運業では原始生産物や農産物に比べ、数量的には特殊農産物と工業生産物にあたるものが圧倒的に多かった。工業生産物の種類は実に様々である。長野県が主要産地となる生糸類や畳糸類に加え、飯田産の元結などが主要な移出品として大量に運送されていた。さらに、砂糖類、材木戸障子類などは主要移入品として大量に移入された。特殊農産物には主として繭類、綿類、煙草、藍玉、麻類であった。

山口氏によると「明治前期（1868～1890）を通じて米・織物・糸・魚肥・砂糖・塩その他各種の商品が北海道から南は九州にいたる各府県にわたって大量に取引されるようになった。当時はいまだ鉄道の発達が十分でなかったので、海上輸送が主体であり、商品の取扱商も各港の船主や問屋、仲買らが中心であった。」¹⁴⁾この時期は、上信越・北関東地方を拠点とする中牛馬会社が陸上輸送の主体であり、これらの地域の織物・糸・繭類・砂糖・塩・藍玉・煙草などの取引商品を、中牛馬会社の営業記録においても読み取ることが出来るのである。

小諸中牛馬会社が取扱っている「東行」荷物（表1）は、一年間で8,266駄にのぼる。量的には大きく増えた。上田～高崎間の荷物の流通量は圧倒的に多かったが、芦田～高崎間においては飯田産物（元結、水引など）の出荷量の増

加が目立つ。これはおよそ中牛馬会社社員による「飯田荷主廻り」の出張活動によって飯田の荷主を獲得した結果だと考えられる。また「東行」荷物で最も多いのは、松本地方の煙草荷の2,267駄であった。その次は、それぞれ、生糸類の637駄、繭類280駄、出売繭217駄、生皮苧131駄、蚕種131駄などの製糸・養蚕荷物であった。そして、地方産物の畳糸387駄、笠類226駄、農産物の米241駄、大豆98駄、小豆174駄、杏干223駄など、荷物の量と種類も著しく増えている。さらに「西行」荷物（表2）を見ると、呉服太物類が2,841駄でもっとも多かった。そして、砂糖類は2,379駄であって、かなり増えた。また、魚類814駄、鰹節425駄、塩273駄などの食料加工品の量も著しく増えた。なお、材木類180駄も目立った。地域経済発展とともに、家や建物を建てるための建築材料の調達の需要も増えた。全体からみれば、明治10年（1877）の時点ではすでに市場経済の発展の影響を見てることが出来る。長野地方では呉服太物類に対する消費増大が推測できる。藍玉、紙類、水油などのような工業品が徐々に増えている。比重が高い商品は、やはり砂糖類、煙草類、鰹節、塩、魚類、杏干などの食料加工品と米、大豆、小豆などの農産物であった。さらに、この時代になると製糸業と養蚕業のさらなる発展がみられる。

つまり、明治前期に、中牛馬会社による輸送活動として、地方と東京間の商品流通が拡大したのである。特に日本海側と太平洋側間の主要流通商品は食料品と加工品を中心としていた。上信越のもっとも大きな地方産業は、養蚕業と製糸業であったが、これらの関連商品はより圧倒的な数量にのぼっていた。その外、農産物、建築材料、日常生活用品などの拡大も著しい。こうした商品流通の実態から、市場経済化の拡大が、人々の消費力の増大を惹起し、地域間の商取引の拡大に結びついていったことが明らかになるであろう。

13) 『増補 明治前期経済の分析』1956年9月、山口和雄、東京大学出版会 第一章「明治七年府県物産表」の分析1～37ページ

14) 『近代日本の商品取引—三井物産を中心に—』1998年4月、山口和雄、東洋書林1ページ

4. 商取引の主体—中牛馬会社の顧客層

各地の荷主を固定客として獲得し、安定的長期的な運送取引を持續させていく事は、陸運企業の経営にとって最も重要な課題の一つであった。前述のように中牛馬会社の運送は、明治初期の雑荷運送を中心とする段階から、次第に固定的な顧客荷主、または特定荷物について長期的に荷物運送の契約を締結する状態へと次第に変わっていった。以下、中牛馬会社の顧客層について、小諸中牛馬会社の例を取り上げて検討する。

4-1. 明治前期における長野県北佐久郡農村地域の生業構造

小諸中牛馬会社の所在地は長野県北佐久郡であった。小諸中牛馬会社に所属してある分社、支社、取扱所も北佐久郡と小県郡に集中していた。『長野町村誌 第2巻東信篇』¹⁵⁾によると、1877～1881年の時期、北佐久郡の地域産業は農業あるいは農桑業が中心であった。男性は農間駄賃稼、農間採薪、農間山稼、農間工商、農間人参培養、農間養蚕、農間漁獵などの農閑余業または農隙の兼業が多かった。このほか、商、漁業などに従事する営業や職人がいた。女性は同じように農業、農桑、農業養蚕が中心であった。冬春の農間期は紡績、縫織（木綿布を製造する）などの自家用衣類などの作業が多かった。この外に製糸工女として働くのも一般的である。

地域の物産と消費販売の行方を見ると、自家用のほかに、商人への売却が一般的である。米、小麦、大麦、蕎麦などの穀物類の生産物は、自家消費がほとんどであるが、米を中心に上州への輸出が通常であった。農作物の牛蒡、梨、茄子を小諸町や上田へと販売した記録もある。特に輸出量が多いのは御種人参（質中、上等）

であり、一部を商人へ販売し、多くは横浜開港場に送っている。松茸、岩茸なども生産され、上州や東京へと輸出された。特に興味深いのは馬沓 15,000 足を小諸町へと販売している事例である。この背景には、中牛馬会社の存在があったと思われる。このほかに養蚕荷物の売買の記録が目立つ。蚕種紙を長野と上州へ、繭と生繭などを上州、武州へ、生糸を近村商人へ販売し、横浜へ輸出したりしていたという。

このように、この時期の北佐久郡では農業を中心しながらも、農村工業として、養蚕業と製糸業が盛んに行われていた。また、仲買商商人が積極的に諸商品の売買活動を営んでいた。中牛馬会社の荷物輸送は、それら地域産業と消費活動を背景として活発化していくこととなったのである。

4-2. 中牛馬会社の顧客層

明治10年代以降の小山家史料から中牛馬会社の顧客層について見てみよう。明治5年8月（1872）に開業した中牛馬会社の記録によれば、当初中牛馬会社の荷物運送は散発的なものであった。表3に示されるように、開業期の中牛馬会社の荷主がもっとも多い地域は上田であった。これは江戸時代の中馬運輸の影響が大きかったためと考えられる。表17「1875年小諸中牛馬会社年始荷主廻り名簿」から、小諸中牛馬会社の主要顧客が誰であったのかを確認してみると、上田町商人がほとんどであったことがわかる。その他は、ほとんど高崎と東京の砂糖問屋と藍玉商であった。これらの上田の商人たちは、近世からの屋号を持ちながら、金物商、魚屋、種油商、石油商、紙商、呉服太物商、葉種売薬商、綿糸商、生糸商、肥料商、材木商、染物商、荒物商などの業種にわたって46人ほどを数える。東京の5人の顧客のうち4人が藍玉商であった。さらに表18「中牛馬会社の得意様と社員名簿」では、得意先は、上田地方だけではなくて長野地方と須坂、飯山などの長野

15) 長野県町村誌刊行会『長野県町村誌』東信篇（1936年）

表 17 1875 年小諸中牛馬会社年始荷主廻り名簿

荷主所在地	目印	屋号	業種
上田踏入	—	宮下宗三郎	—
上田常田町	—	亀屋勘兵衛	—
	—	上野屋又兵衛	—
上田横町	—	嶋屋和助	—
	山吉	酢屋藤兵衛	金物商
上田海野町	—	栃木屋仙七衛門	—
	—	小谷両三	魚屋
	山凸	油屋穂右衛門	種油具石油商
	—	八百屋千代吉	—
上田原町	カネ▽一△	日野屋儀兵衛	薬種売薬商
	—	綿屋太兵衛	—
	—	永野重助	—
	○泉	和泉屋甚三郎	紙商
	—	鼠屋得兵衛	—
	—	萬屋重左衛門	—
	—	萬屋才兵衛	—
	—	岩磐井	—
	□一Û	薦屋民之助	卸商太物商
	×九	綿屋良左衛門	綿糸商兼真綿太物商
	—	鼠屋亀吉	—
	□一	長岡万平	生糸商
	—	薦屋八左衛門	—
	—	共同舗	—
□ム	武蔵屋祐助	生糸商兼繭糸肥料商	
上田木町	—	河内屋文左衛門	—
	カネイ	金井屋幸左衛門	荒物商兼下駄商
	—	小□屋長兵衛	—
	—	柏屋清兵衛	—
上田堀村	—	中屋惣五郎	—
	—	荒物屋忠助	—
上田房山	—	木屋文右衛門	—
	カネ井	木屋弥右衛門	材木商
	—	イセ屋見作	—
上田柳町	—	□屋新左衛門	—
	×●	薦屋忠七	生糸商
	○万	小宮山瀧兵衛	繭糸買次商
	—	若葉屋為作	—
上田スワア	—	荷各屋新十郎	—
上田鍛冶町	—	小林辰三郎	—
上田田町	□太	近江屋増兵衛	萬染物商
	—	田中由兵衛	—
	—	瀧沢亀兵衛	—
上田出橋	—	丸山惣左衛門	—
	—	小林岩志	—
上田在金井村	—	大北□藏	—
高崎	—	荒井正吉	—
	山正一	百足屋弥七	—
東京馬喰町二丁目	—	和泉屋庄八殿	—
	—	升屋重兵衛殿	—
東京小網町	—	上州屋吉兵衛殿	—
	カネ利	伊藤両兵衛	—
東京本八丁堀三丁目	才	西野嘉右衛門殿 直助殿 ○○寛原殿	—
東京舟松町	山六	手塚六三郎	藍玉商
東京本八丁堀一丁目	乙	久次兵三郎	藍玉商

出所：小山家文書の「会社用書留」によって作成

商人の名前、業種、目印の一部は明治 31 年版『日本全国商工人名録』により確認した。

表 18 中牛馬会社顧客名簿 (1887 前後か)

荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種	荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種
小県郡渋村	山田	田口繁太郎殿	養蚕	長野波町	太	本屋専助	—
小県郡海野宿	○山	丸山平兵衛	養蚕		○五	榊屋興助	—
小県郡岩下村	木ヤ	木屋重次郎	木ヤ		山吉	吉野屋善助	—
上田堀り村	○叶	叶屋萬五郎	クワシ、砂糖		山小	萩原要七	呉服太物屋
	山ト	荒物屋忠助	肴ヤ		○八	久保田新兵衛	—
		荒物屋儀助	肴ヤ		山山久	鍋屋久左衛門	金物商
上田常入村		池田濱五郎	養蚕		山加	紙屋磯右衛門	—
	一山久	宮下宗三郎	養蚕		カネ中	紙屋磯右衛門	—
	○モ	沼賀支店	養蚕		山三	釘屋三郎右衛門	砂糖蠟燭兼釘鉄紙商
	○七	上野屋又兵衛	養蚕		×正	正木屋茂平	—
	○七	新井源之助	養蚕		山山加	紙屋磯八	薬物
	□三	亀屋勘助	養蚕		○久	小妻屋清兵衛	麻畳糸元結紙荒物商
	—	米屋常左衛門	—		カネタ	高屋太兵衛	魚類乾物商
	—	油屋文左衛門	—		—	高屋泰助	魚類乾物商
	—	関口儀三衛	—		山タ一	鳥屋音吉	魚類乾物商
	—	小島大次郎	—		—	鳥屋助二郎	—
上田横町	山内	葛屋栄左衛門	—		カネ万	萬屋源兵衛	—
		戎屋周右衛門	—		—	北屋半兵衛	—
	山吉	酢屋藤兵衛	金物商		×正	小川屋勝助	三郎殿
	山六	栃木屋作右衛門	砂糖		×タ	丸山藤三郎	—
	カネ吉	酢屋	太物	—	笠井源吉	薬物	
		□□屋酒三郎	穀物	—	福島屋定五郎	—	
	井久	宮島増太郎	小間物商兼煉油蠟燭石油	—	紙屋藤右衛門	—	
		高野弥平次	筆、墨、硯	—	太田嘉才右衛門	—	
		通来舎	漬物	—	和田鉄之助	—	
		八百屋重次郎	魚	—	榊屋三五郎	金物商兼荒物藍商	
上田海野町	—	白木屋甚三郎	荒物	□吉	北野屋紋吉	—	
	—	白木屋嘉左衛門	茶	—	北沢秀作	—	
	○八	萬屋八右衛門	養蚕	山八	針屋源八	—	
	カネ▽△	日野屋儀兵衛	砂糖、薬種完薬商	□久	山口屋久兵衛	種油蠟燭砂糖紙	
	山上	松屋七兵衛	茶、紙	×万	松井屋岩吉	太物卸商	
	○岩	藤井名右衛門	呉服	—	針屋文吉	—	
	○山一	吉池定之助	養蚕	山十	福島屋庄兵衛	—	
	カネ吉	酢屋元次郎	唐物	○泉	和泉屋弥兵衛	—	
	○●●●一	笹屋綱登	金物	△久	小妻屋萬吉	砂糖紙類乾物商	
	○源	吉野屋源蔵	魚、輪物	—	—	駿河屋専助	—
長野石堂	×二	山形屋興三郎	油、量表	—	本屋久太郎	—	
	八●	八百屋千代吉	乾物	山キ	廣木屋嘉兵衛	砂糖蠟燭煉油商	
	—	山本屋彦兵衛	陶器	—	宮沢清蔵	—	
	—	山本屋庄兵衛	陶器	—	会津屋清七	田町	
	—	山本屋伸太郎	陶器	—	馬場嘉兵衛	武井五郎	
	○柳	柳田字次郎	金物	山上	岡本屋廣吉	麻畳糸商	
		同芳次郎	—	—	北屋新助	—	
	○二	小谷河三	魚屋	○と	大丸屋藤蔵	—	
	井吉	堺屋長左衛門	薬種	カネと●	能登屋興吉	—	
				—	勝田平右衛門	—	

表 18 つづき

荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種	荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種
		堺屋平右衛門	養蚕	長野岩石町		本屋弥助	—
	山凸	油屋勝右衛門	種油石油商			中村屋彦七衛門	—
	—	第十九国立銀行	—			矢島浦太郎	—
上田原町	×タ	綿屋太兵衛	紙商兼陶器商	長野新町	山山五	和泉屋権十郎	—
	山山三	清水三左衛門	魚類乾物商		井カ	柏屋友吉	呉服太物商
	山サ	佐藤精一郎	唐物兼繭糸、屑物買次商			会津屋清十郎	—
	○◇	常磐井	唐物		山上	○鳥屋数右衛門	—
		宮島嘉兵衛	官林	カネ平	鍋屋平七	—	
	山サ	山城屋昌寿	□□	長野伊勢町	山口	紙屋祐三助	—
	一カ	鳥田弥右衛門	魚□屋		○上	長岡源七	—
		汎屋得兵衛	紙		山山五	宮野本太七	—
	扇形万	萬屋犀兵衛	唐物洋物商兼糸類商			田中弥兵衛	—
		越後屋善次	—		○久	○水屋久助	—
	扇形万	萬屋三十郎	時計兼洋物小間物商	長野元善町	カネ一△	海老屋正兵衛	小間物商及雜貨
	扇形万	萬屋金兵衛	—		○十	榊屋興助	—
□一山	萬屋民兵衛	卸商太物商	◇一		榭屋茂兵衛	小間物商及雜貨	
—	□屋亀吉	金物	山カ		海老屋嘉助	—	
山久	鯨屋七兵衛	砂糖	一山中		小榊屋嘉太郎	—	
×九	綿屋良左衛門	綿糸商兼綿類職物商	◇一		榭屋於角八	—	
	布屋莊七	呉服	長野西横町	□一山	小妻屋宗助	—	
久●	汎屋屋甲造	□林			小榊屋市兵衛	—	
扇形甲	甲州屋次郎右衛門	小間物			第十九銀行支店	—	
○泉	和泉屋甚三郎	紙商兼帳簿商		長野西ノ門	井吉	鍋屋富次郎	金物商
□●	笹屋九郎左衛門	薬種	山文		針屋文五郎	—	
	笹屋芳次郎	金物	○上		三崎屋茂吉	麻芋置糸商、醬油味噌醸造業	
□一	萬屋萬平	養蚕糸商兼生糸製造	山九		阿波屋熊吉	麻芋置糸、蚊帳商	
□ム	武蔵屋祐右衛門	養蚕糸商兼繭屑物商	長野桜枝町	カネ久●	坂本武助	麻置糸商	
□ム	伊勢八作	茶 砂糖		○一	三崎屋茂平	—	
	和泉屋又七	—		井口	井口忠左衛門	—	
	井久	宮島鹿次郎		小間物商兼煉油蠟燭石油		布屋利助	麻置糸商
上田木町	○ホ	柏屋清兵衛	呉服太物商	長野横沢		山田屋善藏	—
	山●	河内屋文右衛門	油蠟		○モ	茂倉屋豊次郎	—
	カネ中	中屋宗五郎	荒物商、量表麻類荒物商		入五	吉野屋佐兵衛	—
	○七	小□屋長兵衛	呉服 太物			越前屋幸助	—
	カネイ	金井幸右衛門	荒物商兼下駄商			柳澤万作	—
	カネタ	榭屋種吉	魚 乾物 下駄		長野栄町	○ト	能登屋傳右衛門
	塩屋安左衛門	荒物	山小	林屋吉兵衛		—	
上田柳町	◇一	若妻○為作	唐物 太物	長野西町	カネさ	古着屋定三郎	—
		米屋栄七	唐物 太物		カネキ	和田金三郎	呉服太物商
	◇二	森田屋文次郎	呉服 金物			松井屋佐兵衛	—
		森田次三郎	—			同平兵衛	—
	×●	萬屋忠七	養蚕糸商兼生糸製造			岩作兵衛	—
	○△	塩川傳平	養蚕			高津久助	—
	○万	小宮山瀧兵衛	塩、繭糸買継商		山二	紙屋仁兵衛	和洋酒類醬油各種食品
	○三	伊藤傳兵衛	肥料商			前○屋藤助	—
	□大	池田屋弥八	量表			岡本諸板所	—

表 18 つづき

荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種	荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種	
上田紺屋町		布袋屋九藏	唐物、太物	吉田村		坂口猪三郎	—	
	一山●	河内屋源七	砂糖、油			飯島幸吉	県町	
		島川貞之助	—			田中銀行支店	—	
	山吉	吉田屋支店	油蠟			長野銀行	—	
		島屋勘兵衛	養蚕			増田屋専助	—	
常磐城村		大坂屋源右衛門	養蚕		山中	神田屋平兵衛	—	
					×モ	銀杏屋茂助	—	
	山吉	吉田屋半右衛門	魚類乾物商		山正	落合新作	—	
		榊屋助次郎	薬種	埴級郡松代町	□喜	幾下屋傳兵衛	—	
		木屋兵平八郎	材木商				同清太郎	—
		相屋亀十郎	鉄				同佐助	—
	○屋藤十郎	肴			山山久	湊屋清作	—	
	小林辰三郎	養蚕			○山	能登屋芳五郎	—	
						現金屋重右衛門	—	
房山	○井	木屋文三郎	材木商	越後蒲原郡柏崎与 安田村□□三村		本間三吉	—	
	カネ井	木屋弥左衛門	材木商			山田平左衛門		
	◇	湊屋新右衛門	薬種			山田平左衛門		
	山万	萬屋支店	—			○柏	中林弥左衛門	
上田		平林傳十郎	養蚕			相田坂太郎		
	—	第二十四銀行支店	銀行		山山川	根立興左衛門		
	—	上田銀行	銀行		山ト	相田徳助	縮布商兼反物商	
	—	塩尻銀行支店	銀行		山市	酒井市助		
埴級郡矢代駅	—	松代銀行支店	銀行		○い	黒沢幸左衛門		
	山石	福田屋栄三郎	砂糖		山川	青木津左衛門		
	◇ト	栃木屋幸右衛門	唐物		山ト	有坂茂市		
更科郡篠ノ井駅	カネ万	萬屋忠三郎	—		○伴	丸田源兵衛	縮布商	
北原村	○北	亀屋友太郎	砂糖		山上	三井田仲次		
		柳屋伊三郎	砂糖		山九	三井田常四郎		
埴級郡須坂町	山一	牧屋新七	製糸業兼呉服太物商	柏崎駅通商講	山ヤ	神林三之助	薬種完業商	
	山〇〇	八幡屋林右衛門	金物古銅鉄兼指物商			山平	松原平兵衛	
	山八	山埔屋八左衛門	—			カネサ	洲崎佐吉	
		土屋重右衛門	—			○小	小林重三	
	東行社		遠藤万作	製糸業兼製糸気缶業		山石	桂木傳次郎	
			青木甚九郎	製糸業兼製糸気缶業		カネ中	芝井治作	
			青木長兵衛	製糸業か		入セ	入江清助	
			神林民蔵	製糸業		山丁	老山莊左衛門	
			小田切豊太郎	製糸業		カネ山	小山惣八	
			小田切新蔵	呉服太物商羽二重製造業		□八	阿部善平	
			牧茂助	製糸業		□ト	前川郡八	
			牧金作	製糸業か		カネ小	小河弥助	
			牧友之助	製糸業か		カネ山	小林百助	
			持田藤治郎	製糸業	同頭城郡	カネの	角屋又吉	金物
	小田切又三郎	製糸業		山山五		内藤要吉	魚	
俊明社		小田切武兵衛	製糸業か			カネ平	山田孫作	魚
		青木増三郎	製糸業か			カネ長	桐場長松	金物
		小妻屋清作	製糸業か		◇二	針屋仁左衛門	金物	

表 18 つづき

荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種	荷主所在地	目印	荷主と屋号	業種
俊明社材料		山岸佐五郎	製糸業か	高田町	山夕●	信濃屋慶次郎	
		松沢重三	製糸業か		山山石	藤村長一郎	
		小林孫三郎	製糸業か		山リ	篠田厘八	
埴科郡小布施駅		田中利助	製糸業か		○ヨ	鳥田幸平	
	カネ山	山屋卯一郎	—		○世	鳥倉吉左衛門	
	○カ	高津友之助	—		○石	石沢太平	
	○吉	同猪八郎	—		山三	箕島伊三郎	
	山本	笹屋金作	—		□イ	同伊八	
	山サ	同辰五郎	—		□吉	鳥倉吉四郎	
	□ト	角屋藤兵衛	—		上●	上野権七	
高井郡中野町	山●●●	富田屋次兵衛	—		山ヨ	清水興三郎	
	カネ上	高木芳作	呉服太物商		山九	小山九分左衛門	
	○平	青木弥兵衛	呉服太物商		カネタ	石沢太助	
	□上	畔上七郎	小間物商兼度量衡専売		□ヨ	大野興四郎	
		成田屋金太郎			カネ六	中田彦六	
水内郡飯山町		中島作作			○宗	箕島宗兵衛	
	○さ	佐々木嘉助			山ウ	山岸卯一郎	
	○本	堀内恒次郎			カネ大	大野平四郎	
上水内郡長野大門町	山本	山本幸吉			山山長	瀧田長太	
	○為	吉野屋名左衛門	呉服太物商		山ヲ	岡田宅平	
		荒屋彦八	—		カネ丁	○○字左衛門	
		小河屋安太郎	呉服太物商	越中高岡町 戸須郡管笠商	×九	上野九平	
		増屋代吉	金物		○吉	衛 吉平	
	○	協如堂烏津	書林		○キ	箕島権左衛門	
	○十	西川金助	唐物、小間物商		山吉	樋口幸吉	
	□一山●	橋屋弥兵衛	唐物		○一	上野市平	
		小榊屋徳兵衛	薬種		カネウ	伊崎宇八	
	山一	米屋市右衛門	—		山山上●	福岡定吉	
	×ト	能登屋茂兵衛	—			中村久平	
	山口	山城屋伸之助	小間物商兼洋服裁縫		カネス		
		小榊屋傳之助	—		山久		
		三源屋愛之助	—		カネ八		
		宮坂金太郎	—		山矢	矢部重三	麻商
	葛屋伴五郎	—	山山虫		前田忠平	麻商	
○卵	柳田忠兵衛	砂糖蠟燭兼諸油紙類商	山ヤ		神林桑吉	麻商	
	増屋太郎	—	山ヤ		同三之助		
	永寿屋太七	薬品商兼医療、写真器械商	◇小	藤井幸三郎			
カネモ	宮田屋茂兵衛	—	山小	小山利八			
	宮田屋島之助	—	カネ中	川口甚太郎	下街		
	宮田屋善平	—		赤川太右衛門	新町		
◇ト	栃木屋茂兵衛	—		小口善平			
○忠	宮浦屋幸吉	—		中村鎌次郎	御田川		
カネ中	松田善七	小間物商及雑貨					

出所：小山家文書の「中牛馬会社得意様と社員名簿」 明治20年代前後か

県下の各郡町村まで拡大している。さらに、長野県下のみならず、新潟、富山の県下まで顧客層がひろがっている。上田地方の顧客の人名は114人、その中で銀行荷主は4つであり業種の数量も増えている。特に養蚕業種の商人が一番多く19人、その次は魚商10人であった。また陶器商、唐物商、時計洋物商などの輸入物を取扱う商人も増えている。長野地方がもっとも多く129人ほどだった。業種を特定できない者が多いが、呉服太物商、麻畳糸商、魚干物商、小間物商、蠟燭油砂糖商、金物商、唐物商などが多く存在していた。さらに、須坂では場東行社、俊明社、または諏訪伊那地方の開明社などの、当時有名な大製糸結社と製糸家の名前もある。これらの製糸結社と製糸家は明治20年代から

中牛馬会社のもっとも重要な顧客となった。

4-3. 商家の共同出荷、共同仕入の担い手としての中牛馬会社

明治10(1877)年代に入ると各地の商人が同盟組織の商社、講、組の形式で出荷と仕入れの貨物運送を各駅中牛馬会社と契約しており、その際の契約書と帳簿が多く残されている。明治11年(1878)以降、中牛馬会社の組織を再編成するとともに、中牛馬会社の固定荷主層として共同結社の組織商社、講、組などの名前が増えてくる。その代表的なものが長野大連社、明商社、愛信社、通商講(新潟高田)、笠栄組(富山)、坂東講、権現講、長野商社などである。表19「中牛馬会客商人連盟組織」によれば、

表19 中牛馬会社の顧客商人連盟組織

契約期間	荷主所在地	仕入先/出荷先	荷主名	業種	屋号	仕入商品/出荷商品	原発会社
明治19年7月 ~12月31日 (1884)	東筑摩郡 南北保志町	小諸一山 高崎山正一 東京諸店	寺村徳十郎	砂糖商	—	砂糖 マッチ 石油	信濃中牛馬会社浦野 刈谷原分社
			堀内半蔵	砂糖商	山半		
			飯田屋竹内国次郎	砂糖商	上●		
			滝沢文吉	—	—		
			萩原磯吉	—	—		
			遠洲屋山岸長三郎	砂糖商	○井大		
			今井六衛	洋物類商	◇六		
			北村嘉寿	—	—		
			中田音次郎	石油ランプ商	—		
			丸山時三	—	—		
			石田周造支店	—	—		
			丸山源内	洋物・硝子・石油・荒物	○三		
			寺島嘉七	茶・陶器・砂糖商	—		
長瀬○次助	—	—					
明治18年(1885) 3月から	富山県越中国 礪波郡四十万村 笠栄組	高田~松本 高田~高崎 高田~韭崎	石澤角助	—	カネタ	笠荷物	新潟県高田中牛馬会社、 長野県長野、上田、松本、 小諸、野沢中牛馬会社、 群馬県松井田、 高崎中牛馬会社
			中村久平		山山上●		
			篠田理八		山リ		
			石澤太平		○石		
			山岸兼長		カネ丁		
			滝長太郎		山山去		
			□嶋伊八		□イ		
			清水興三郎		山ヨ		
			上野権七		上●		
			山崎清五郎		カネセ		
			大野太七		○正		
			富田宅平		山ヲ		
			衛吉平		○吉		

表 19 つづき

契約期間	荷主所在地	仕入先/ 出荷先	荷主名	業種	屋号	仕入商品/ 出荷商品	原発会社
			立沼宇太郎		○ウ		
			山岸宇一郎		山ウ		
			佐藤崎宇八		カネウ		
			嶋田幸平		○ヨ		
			大野平四郎		カネ大		
			前島宗平		○宗		
			島倉吉三郎		○吉		
			前島武十郎		カネス		
			上野九平		×九		
			中田彦六		カネ六		
			上野市平		○一		
			藤村長一郎		山山石		
			大野興四郎		□ヨ		
			笹島清五郎		○キ		
嶋田元右衛門	◇小						
明治 17 年 (1884) から	長野県長野町 阪東講	長野～高崎 ～東京 日本橋区 各店	萬屋成田源兵衛	国産畳系麻布・畳表荒物商	カネ万	麻、畳糸、 細美荷物	長野、篠野井、上田、小諸、 軽井沢、横川、松井田、 高崎各地中牛馬会社
			森茂兵衛	—	○一		
			塚田宗助	—	—		
			井上直三郎	—	井上		
			柏屋寺島友吉	呉服太物商	井柏		
			三崎屋森茂吉	麻畳糸商	○上		
			坂本武助	麻畳糸商	カネ久●		
			太田喜左衛門	—	山さ		
			和田喜代八	—	山カ		
			峰村三代吉	—	○小		
			小妻屋宗助	—	□一山		
会津屋長十郎	国産麻類商	□吉					
今井武助	—	カネ井					
明治 17 年 (1884) 7 月から	長野県長野町 権現講	長野～高崎 ～東京 日本橋区 各店	阿波屋保科熊吉	国産畳系麻・麻布商	山九	麻、畳糸、 細美荷物	長野、上田、小諸、松井田、 高崎、東京中牛馬会社
			能登屋斎藤傳右衛門	—	○ト		
			布屋羽場利助	麻畳糸商	◇		
			さの屋岩吉	—	カネ夕●		
			越前屋幸助	—	山山小		
			紙屋弥兵衛	呉服太物洋物商	山加		
			林屋吉兵衛	—	山小		
			海老屋助次郎	麻畳糸商	山木		
明治 16～21 年 (1883～1888)	長野町明商社	東京～ 長野地方	萩原要吉	呉服太物商	山小	諸荷物、 砂糖類	高崎、松井田、小諸、上田、 内川、長野中牛馬会社
			立岩磯右衛門	—	—		
			島津久助	—	—		
			山口祐三郎	—	—		
			土屋茂吉	—	—		
			飯島幸吉	—	—		
			三上安太郎	—	—		
			牧野嘉助	—	—		
			渡辺仁兵衛	呉服太物商	山二		
			松倉吉三郎	—	—		
和田金三郎	呉服太物商	カネキ					
市川藤八	金物商	山ト					

表 19 つづき

契約期間	荷主所在地	仕入先/ 出荷先	荷主名	業種	屋号	仕入商品/ 出荷商品	原発会社
			樽屋宮澤三五郎	金物商	山五		
			牧屋牧野録之助	水油蠟燭砂糖香油商	○三		
			山城屋山口仲之助	小間物商兼洋服裁縫	山口		
			大和屋松田善七	小間物商及び雑貨	カネ中		
			海老屋牧野正兵衛	小間物商及び雑貨	カネ一△		
			榎屋原茂兵衛	小間物商及び雑貨	◇一		
			小妻屋宮澤万吉	砂糖蠟燭商	△久		
			鳥屋小出音次郎	魚類乾物商	山ター		
明治 19 年 6 月～24 年 (1886～1891)	長野町愛信社	東京、高崎、 足利、相生、 川越～長野 地方	小林岩吉	太物卸商	×万	諸荷物	東京帝国中牛馬会社、高崎、 横川、松井田、伊勢崎、 軽井沢、上田、屋代、 篠野井中牛馬会社、 帝国中牛馬会社代理店 長野開運組
			小野和兵衛	—	—		
			佐治木清七	—	—		
			小林傳兵衛	薬品商	◇外		
明治 11～14 年 (1878～1881)	長野町大連社	東京、上州、 武州～ 長野町	和田金三郎	呉服太物商	カネキ	諸荷物	高崎、松井田、小諸、上田、 篠野井、長野中牛馬会社
			吉野屋藤井名左衛門	呉服太物商	○為		
			高田屋前島島之助	小間物商	○モ		
			高田屋前島茂七	菓子製造商	カネモ		
			山田富次郎	金物商	井吉		
			関口政五郎	魚類乾物商	山キ		
			大内梅太郎	毛織物卸商	○忠		
萩原定吉	呉服太物商	山小					
明治 18 年 (1885) から	新潟県北越高田 商人	東京～高田	高田商人	—	—	諸荷物	高田、長野、上田、小諸、 高崎、東京中牛馬会社
明治 22 年 (1889) 2 月から	長野町長野商社	東京～長野	社長市川藤吉	金物商	山ト	不明	共同中牛馬会社、横川、 軽井沢、長野中牛馬会社
明治 17 年 9 月から (1884)	新潟通商講	高田～高崎 高田～前橋 高田～松本	中林弥左衛門	—	○柏	諸荷物	高田、長野、上田、小諸、 高崎、松井田中牛馬会社
			相田坂太郎	—			
			根立興左衛門	—	山山川		
			相田徳助	縮布商兼反物商	山ト		
			酒井市助	—	山市		
			黒沢幸左衛門	—	○い		
			青木津左衛門	—	山川		
			有坂茂市	—	山ト		
			丸田源兵衛	縮布商	○伴		
			三井田仲次	—	山上		
			三井田常四郎	—	山九		
			神林三之助	薬種売薬商	山ヤ		
			松原平兵衛	—	山平		
			洲崎佐吉	—	カネサ		
			小林重三	—	○小		
			桂木傳次郎	—	山石		
			芝井治作	—	カネ中		
			入江清助	—	入セ		
			老山莊左衛門	—	山丁		
			小山惣八	—	カネ山		
阿部善平	—	□八					
前川郡八	—	□ト					
小河弥助	—	カネ小					

表 19 つづき

契約期間	荷主所在地	仕入先/ 出荷先	荷主名	業種	屋号	仕入商品/ 出荷商品	原発会社
			小林百助	—	カネ山		

出所：小山家文書の諸契約書と荷物受払帳の記録によってまとめて、筆者より作成した。

商人名前、業者、屋号目印の一部は明治25年と明治31年出版した『日本全国商工人名録全』によって確認したのがある。

それらの同盟組織は上信越地方各地の有力な商人あるいは結社を連合したものであり、その活動は長年にわたって続いていた。明治11年(1878)からの長野大連社、明治16年(1883)からの明商社、愛信社はいずれも長野町の商人連盟である。さらに権現講、阪東講は長野町麻畳糸を取扱う業者連盟である。中牛馬会社が積極的にこれらの商家の共同出荷ないし共同仕入についての運送契約をしていたことから、当地の貨物運送業を一手に扱い独占的な取引をしようとしていたことが分かる。

その後商社、講などの名称をもつ荷主連盟が増える。これらの組織は地域の主要商人の多くを総轄するものだった。中牛馬会社は、仕入先からの様々な荷物の輸送を、長野各地の荷受主から依頼された。中牛馬会社の顧客層はそれぞれ地域の有力商人とその連合組織が多かったことが分かる。また、東京の藍玉商、高崎の砂糖問屋などの荷物を長野県下へ輸送することも長年にわたって続いた。

この時期における市場経済の中心は、東京はもちろん、高崎、小諸、上田、長野、松本といった近世城下町を引き継いだ地方都市であった。明治維新以降の国内市場経済の発展は、それら伝統的な経済社会的集積性を基盤としていたのであり、商品流通と結びついた当該地域の陸上貨物輸送の結節点と主要なルートが北国街道と中山道沿いに集中していたことも、そのような事実を端的に示すものだったのである。

5. おわりに

本稿では主として、明治初期に創立した中牛馬会社を事例として小諸中牛馬会社の運送記録を分析することによって、明治前期の運送ルートと特徴の変化、運送した荷物の数量と内容の変化、取引主体の顧客層を考察した。結論をまとめれば、以下ようになる。

まず、信州の中牛馬会社は近世の中馬を母体とし、明治維新以降新たな企業組織を形成した。その上で、創業時から上信越の高田、長野、上田、小諸、高崎、倉賀野、東京を地域的活動拠点とする広域的でかつ日本海側と太平洋側を結ぶ長距離運送ルートを作り上げた。この運送ルート沿いに各地の中牛馬会社が、牛馬背による陸上輸送を行い、高崎馬車会社や倉賀野河岸からの利根川舟運と連結するような、陸運と舟運の継ぎ立て混合運輸網を作りあげた。1879年の陸運営業自由化以降、さらに運送範囲を拡大するとともに、運輸手段の改良、運送サービスの更新によって、運送日数の大幅な短縮を実現していった。そして、鉄道開通期まで、馬背、舟運、馬車などの運送手段を組み合わせた独自の一貫した長距離運輸網を作り上げることに成功した。

次に、帳簿記録の分析により、中牛馬会社が取扱う荷物の量と内容を検討した。創業以降の5年間で雑貨取り扱い荷物を中心に輸送量が著しく増加したが、「大福帳」の記帳法もそれに応じて変化し、「東西」荷物の仕分け法、特定の荷主と荷物の単独記帳法が工夫された。これは、市場経済の発展によって地方間の商取引が

拡大し、民衆の消費力が増大したことに対応したものであった。明治前期における荷物運送の「西荷」と「東荷」、「西行」と「東行」の輸送貨物データ分析により、中牛馬会社の運送荷物は明治期の重要な商業的農作物及び農村工業品であったことが判明した。繭・生糸・綿糸・麻・織物・藍・菜種・油・蠟・煙草・茶・酒・醤油・砂糖・紙・畳菴類などである。中牛馬会社は、その物流業者としての運送活動によって、明治維新後の上信越地方の商取引と工業生産の発展を促進するという歴史的役割を果たした。

最後に、中牛馬会社の顧客層の検討によって当時の商取引の主体がどのような存在であり、どのような商品市場が存在したかを明らかにした。明治7～8(1874～1875)年の顧客層はほぼ上田町の商人が中心であったが、明治20年(1887)前後になると、その顧客層は長野県全域をはじめ、新潟県、富山県、群馬県にまで広がり、その業種も飛躍的に増えた。明治10年代の顧客層として登場した長野町の商人同盟組織は、共同出荷と共同仕入による市場取引上の技術革新でもあり、これが中牛馬会社の経営的な安定性を実現した。明治前期における市場経済の中心地は、東京はもちろん、高崎、小諸、上田、長野、松本など、近世の城下町として地方経済の結節点であった。地方商人と東京仕入先の取引ネットワークは、このような近世期の商品取引ネットワークの延長線上に展開されていたのであり、地方における商取引の拡大もたらず貨物需要の増大こそが、中牛馬会社経営にとっての利益の源泉であり、発展の可能性を提供する母体であった。

中牛馬会社は個々の地域の会社＝分社が連結した同盟企業体であり、各地分社は独立採算制をとっていた。小諸中牛馬会社は自社荷受けである「原発荷物」の数量が少なかったため、他地域の中牛馬会社に比べ、荷物の継立中継地の役割が大きかった。原発荷を増やすことが小諸中牛馬会社にとっての業務拡大上の課題だっ

たのだが、それは諏訪・伊那地方の製糸荷物の大量輸送によって実現可能なる。この歴史的な過程については別稿で検討することとなる。

参 考 文 献

- 山本弘文『維新期の街道と輸送(増補版)』1983年、法政大学出版局
山本弘文『近代交通成立史の研究』1994年、法政大学出版局
老川慶喜『産業革命期の地域交通と輸送』1992年、日本経済評論社
豊田武、児玉幸多編『交通史』1970年、山川出版社
日本通運株式会社刊『社史 日本通運株式会社』1962年
長野県史刊行会『長野県史 近代資料編 第七巻 交通・通信』1981年
長野県史刊行会『長野県史 近代史料編 第五巻(三) 蚕糸業』1980年
長野県町村誌刊行会『長野県町村誌』東信篇 1936年
古島敏雄『江戸時代の商品流通と交通—信州中馬の研究—』1951年、御茶ノ水書房
明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料別冊(19) IV 一商況年報(明治十五年)後編—』1966年
大矢誠一『運ぶ—物流日本史—』1978年、柏書房
長野県『長野県政史 第一巻』1981年
小諸市教育委員会『小諸市誌 近・現代編』2003年
山口和雄『日本産業金融史研究 製糸金融篇』1966年、東京大学出版会
渋谷隆一『都道府県別 資産家地主総覧〔長野県〕』1997年、日本図書センター
長野県史刊行会『長野県史 通史編 別巻・年表・索引 年表』1992年
長野県史刊行会『長野県史 近代資料編 第五巻(一) 産業政策 産業団体』1991年
渋谷隆一『明治期日本全国資産家地主総資産資料集成Ⅰ』1984年、柏書房
渋谷隆一『明治期日本全国資産家地主総資産資料集成Ⅱ』1984年、柏書房
富岡製糸場誌編纂委員会『富岡製生糸誌』1977年
山口和雄『近代日本の商品取引—三井物産を中心に—』1998年、東洋書林
海野福寿『明治の貿易』1962年、塙書房
山口和雄『増補 明治前期経済の分析』1956年、東京大学出版会